



【1】『ひと・中島 寛の山と人生』その1

はじめに

中島 寛は、昭和13年(1938)3月、浦和市生まれ、平成10年(1998)10月、短すぎる60年の生涯を閉じた。短いとはいえ、その生涯は、山を愛し、人を愛し、仕事にも真摯に打ち込む密度の濃い人生であった。

類稀な強い意思力、体力、度量ある広い心根、これらは持って生まれたものであろうか、それとも、努力を重ねて経験によって培ったものでもあろうか。いつも他人には柔和に接していた。それらの「あかし」は、共に過ごした周囲の多くの人々が語り、書き残しており、ここに、その断片を紹介させて頂くことにするが、この人物像は、容易に描き切れるものではない。

中島は、浦和高校時代、生物部で昆虫採集に親しみ、同時に登山も楽しんだ。

昭和32年(1957)一橋大学経済学部に入學し、躊躇なく山岳部に入部、すぐに部の行事、雰囲気に関心でいった。新入部員対象の剣早月尾根合宿後、友(中川滋夫)と続けての延長戦、それは茅野から八ヶ岳に潜り込み、雪洞で1泊、ガスの晴れ間を見つけ阿弥陀岳を往復する等、早くも、山登りの魅力に取りつかれた強力な山行に嵌って行った。以後、数々の難コースをこなして行くが、弱った友の荷物まで黙々と背負い込む体力と思いやりを具有していた。

彼の学生時代は山登りだけではなかった。広範な読書と、プレ・ゼミで2年生から中山伊知郎教授と双壁を為した杉本栄一教授の門下、種瀬教授に師事した社会主義経済学、そして固辞する中、嘱望されて担ぎ上げられ、1年間の条件で引き受けた3年生時の学生運動リーダー(一橋大学後期自治会委員長)として、昭和34年から35年初夏まで安保闘争デモ等にかんがりのエネルギーを傾注した。

国会周辺デモに参加した、ある1年生の後輩は、長身で頑強そうな肩幅の中島先輩が、登山靴で足元を固め、国会周辺デモに向かう新入生に付き添っていたのを覚えている。隊列の先頭から、最後尾まで駆け足で移動し、全員に目配りしながらハンドマイクで注意する中島先輩を、さしずめ小学生の遠足を引率する教師のように頼り甲斐のある存在と感じた。そしてその中島先輩は激しいデモの後、夜遅くまで、参加者に怪我人はいないかと幾つかの病院を駆け回っていたという話しも後で知った。(門田衛士昭和35入学)

中島は先に、後述のアンデス登山隊に選ばれ、その準備にも取り組んでいた。人知れず時間を見つけては山に籠る日々もあったから、彼は超人的な、二重、三重の「精勤」に励んでいたことになる。大学のゼミでは、中島が教授の隣に座って、「資本論」ドイツ語輪読でもよく発言している様を見て、「奴はいつ勉強しているのだ」と訝しく思っていた仲間もいたらしい。

後述するように彼は、日本山岳会の有数のクライマーとして選抜され、エベレストにも臨むが、幾多の困難な山行を繰り返しながら、周到さによって、遭難事故の失策は無く、怪我と言えはカナディアン・ロッキーでの凍傷ぐらいで、「無事是名馬」の喩えを地で行くものであった。仲間たちの遭難に際しては、率先して現地に駆けつけ、捜索から、遺体の収容に至るまでの労を厭わなかった。壮年時に肺結核で、昭和39年(1964)国立中野病院に入院し、右肺上部切除した。数年後はフルマラソンに何度も挑戦している。還暦前、最後の4年間がんの

転移が続いた。最後まで闘ったが平成10年10月、敢え無く力尽きた。よく生きることと同じく、よく死に行くことは難しいという、その死に向かう彼の姿勢は、周囲の多くの人たちに感銘をあたえるものであった。

お別れ会には1200名もの関係者が集まった。彼の遺言で席順は決めず、参列者は身分の差別なく長時間立ち尽くすことになった。夫人から読み上げられた、生前からの座右の散文詩「丁度よい」、この詠み人知らずの詩は、新聞の弔問記事でも紹介されたが、当日の参会者はもちろん、聴く者をして故人の充足感と抜けきった諦観、をあらわして余りある内容であり、感銘を与えるものであった。その出所は当時不明であったが、莫逆の友、平尾光司氏により、飽くなき執念をもって、後述の如く、突き止められることになる。

お前はお前で丁度よい。頭も体も名前も姓もお前にそれは丁度よい。

貧も富も子も息子の嫁も、その孫もそれはお前に丁度よい。

幸も不幸も喜びも悲しみさえも丁度よい。歩いたお前の人生は悪くもなければ良くもない。

お前にとって丁度よい。自惚れる要もなく卑下する要もない。

上もなければ下もない。死の日、月さえも丁度よい。

1. 山岳部アンデスに挑む 来年(昭和36年・1961) 4月 未踏峰“プカイルカ”へ 中島 寛

(一橋新聞、1960.10.30 より)

来年の4月、山岳部では南米アンデス山脈に初めて登山隊を派遣することになった。これは本学創立83周年を記念し、併せて一橋山岳部創立40周年の記念事業として行われるものである。山岳部年来の夢も、愈々現実の軌道に乗り始めた。吾々山に魅入られた者が必ずいつかは持つ夢—それは日本で経験することのできない氷河を辿り、雲と水と岩の天地に自分の力を思う存分に奮ってみたいということである。このような夢は何年も前から先輩から後輩へと語り継がれ、吾々の中に育てられてきた。海外の文献を漁り、登山技術の習得を図り、そして自らの実力研鑽に努めてきたのである。そのような蓄積を今吾々は開花させようとしている。

アンデス山脈は、南米大陸の北から南へ7000kmにわたって連なる巨大な山脈である。太平洋に沿っていわば南米大陸の背骨を成すアンデスは、またその幅においても広いところでは800kmもあり、高度は4000mから6500mに及んでいる。その複雑な機構と規模の大きさから、アンデスはヒマラヤとともに、世界の岳人たちの注目の的となっている。その中でも、ペルーからボリビアにかけての山域は、6000m級の急峻な高峰が集中しており、美しい氷壁とともに我々に限りない魅力を与えてくれる。我々の今回の目標は、まずペルーにおいて氷河を分け入り、コルディエラ・ブランカと言う山群の6000m以上では唯一の残されている未踏峰、プカイルカ中央峰(6010m)登攀することにある。続いてボリビアに移り高山湖として有名なチチカカ湖の北に聳えるアポロバンバ山群の探査を行い、未踏峰の幾つかの山を登りたいと考えている。コルディエラ・ブランカとは、(白い山脈)という意味であり、その名の通りペルー北方に傲然と構えて「世界で最も美しい山々」を誇っている。昼でも星の見えそうな濃い空のブルー、黄金色に輝くパンパス、その熱帯的な風土の中に聳え立つ白嶺は、自然の美に憧れ困難を克服することに自由を見出す世界中の山男たちに、これまで幾多となく闘争の場となってきたのである。我々の目指すプカイルカの中央峰はそのようなブランカ山群の中でも峻峰中の峻峰であり、過去アメリカ、フランス、イタリアの3隊によって登頂が試みられたがいずれも失敗に終わっている。大きく口を開けたクレパスと氷の垂壁は極めて高度の技術を必要とされ今後の最大の課題となっている。一方ペルー、ボリビアの国境に跨るアポロバンバ山群はやはり6000m級。高峰を多数擁しながら、まだ完全な地図さえできていないほど未開拓の現状である。現在ヒマラヤにおいては、8000m級の登頂に終止符が打たれ、7000m級のより難しい登攀を目標としたヒマラヤ登山史上第2の黄金時代を迎えている。より高く、より難しくという可能性の限界を狭めて行こうとする人間の山への情熱は、ヒマラヤ登山史のそのような転換の中で益々触覚を伸ばしながら世界を広げている。かくしてヒマラヤより高度が劣るとはいえ、技術的な難しさを伴うアンデスの山々は、新しく脚光

を浴びるようになってきた。日本においては、まるで忘れられていたこの山域に最初の杭を打ち込むことによって、日本山岳史に与える影響は大きいだろう。しかし、我々が山へ登るのは「山がそこにあるから」登るのではない。我々は「何か」を求めて山に登る。その底にあるものは、未知の世界に人間の手によって新たな照明を与えようという欲求である。

地球のウラ側にあるラテン・アメリカその距離にもかかわらず、南米諸国は日本の移住地として、また海外投資市場として日本の社会や経済にとって余りにも深い絆で繋がれているのだ。しかし「動乱とクーデターの国」の実態は我々にとっては未だ未知の領域である。詳細は割愛するが、我々の今回の第2の目標はそのようなラテン・アメリカの経済事情を足で探ることにある。その後進性とはいかなるものか？

我々は、学生として、結果はともあれこのような探求なくして山登りはありえないと思っている。

隊員は、隊長吉沢一郎※ 副隊長甘利仁郎、中村保(昭和33)3名、学生3名。(中島寛・中川滋夫・倉知敬)、日程は4月1日、横浜発。10月中旬、帰国。ペルー滞在は約2ヶ月、ボリビアでは1ヶ月半の行動を予定。

※ 吉沢一郎:(昭和3卒)1903年 - 1998年1月、元日本山岳会副会長。1977年、総指揮を取り、日本登山隊はK2 登頂を試みて成功。(世界で2 番目)。深田久弥他とともに日本のヒマラヤ研究の第一人者。

以上は、昭和35年、山岳部のOB、4年生、中島 寛たちによる60年前のアンデス登攀計画である。特に中島は自治会委員長の重責にありながら、おそらく吉沢隊長、中村保(昭和33年卒)先輩等、日本山岳会の重鎮の先輩岳人に揉まれ、相当な議論、事前研究を重ねて積み上げた計画であろう。

特にこの山を目指す目的が明確に表現されている。一橋山岳部の特徴である現地の社会経済学的環境調査も内包されている。60年安保の高揚、過熱化する闘争の先頭にありながら、一方で地道に海外登山企画を積み上げることは、中島ならではの周到なものであり1年後に見事な結実、成功をもたらすことになる。

2. ボリビアを経て10月帰国 プカイルカ登頂の ペルー・アンデス隊 (一橋新聞、1961.7.10)

吉沢隊長より、登頂成功の電報が高橋学長宛に6月23日木曜日打たれた。その電文:「アンデス山脈に残されていた6000M以上の難峰・プカイルカ北峰 6059M はお陰様でついに吾々遠征隊の全登攀隊員にその頂上を踏むことを許しました。6月12日と13日両日です。17日全員ベース・キャンプに集合し21日頃、リマに向かいます。色々のご配慮、心から感謝申し上げます。なお隊長も5150 M の第2キャンプまで登り指揮を下しました。病人、傷人一人もおりません。イタリー隊は中央峰約6000 M を攻撃中。」

当峰に対する攻撃は2隊にわたって行われたが2度とも登頂に成功。

この模様について登山隊事務局の高崎治郎氏は次のように語っている。「第1次登頂隊の中村、中川、中島の3隊員は相当な困難の末に登頂に成功したことがわかる。というのは、登山は、キャンプを出発するのは大抵2時か3時からであり、登頂時間は12日午後6時15分とある。従って16時間くらい要している計算になり、彼らの苦闘ぶりがうかがえる。第2次登頂隊の方は、第1次隊のルートが出来ていたので比較的楽だったのではないか。」



(プカイル山頂の中島 寛)

(後日談) 門田衛士(昭和35入学、42年卒)元共同通信専務理事、顧問 令和3年5月逝去)

ある時、「奥アマゾン探検」に没頭して取り組んでいた門田は吉沢先輩と大岡山駅前で珈琲を呑み乍ら談笑した。吉沢一郎氏は口元をはころばせながら語った。

「1961年のアンデス遠征の時の一橋には、中島という凄い男がいてね。あの時は山登りだけでなく、学術調査でも良い仕事をしたと思う。中島君はその中心人物の一人だった。」

3. （回顧） 人生60年、駆け抜けた男

石 弘光（昭和36卒、元一橋大学学長 元税制調査委員会会長）

1957年（昭和32年）4月、中島も私も国立の桜が満開の頃、憧れの一橋大学の門をくぐった。入学式もそこに、雑木林の片隅にある山岳部の部室に集まったのが、10数名の山好きな新入部員であった。

新入生歓迎登山、5月連休の山行、谷川合宿と続き、待望の夏山合宿が始まった。肩に食い込む12貫もある荷物をボッカし、やっとたどり着いた劔沢での定着合宿は、来る日も来る日も雨だった。

そのような辛い日に、いつも元気で仲間を激励し、嫌な仕事も率先してやってくれたのが中島だった。並外れた体力、そして大食漢の彼は、まさに山男として山岳部に根を下ろし部員としても着々と成長していった。

4年生の時、サブ・リーダーに。春山、冬山合宿では、いつも先頭に立ち、またアタック隊員であった。大天井岳から槍を、長躯 1日で往復したことなどは、彼だからできた登攀であろう。彼は、ただ馬力に任せて先頭に立って皆を引っ張るというだけではなかった。バテて落伍しそうになった仲間に、絶えず気を配り、時には人一倍重い荷物を担いでいるのに、さらに他人の荷物も持ってやるという男だった。

卒業を控え、1961年、一橋が初めて企画したペルー・アンデス遠征隊に参加、輝かしい足跡を残して帰ってきた。その後、日本山岳会のエベレスト登山に加わり、未踏の南壁を8千mの地点まで登攀したという中島ならではの仕事をやってくれた。中島が、昭子夫人と結ばれたのも、山があつてのことだった。

1967年5月、当時の山岳部の2年部員だった中村慎一郎君が、5月の連休に鹿島槍天狗尾根を下降中、滑落、即死という痛ましい事故が起こってしまった。救援に真っ先に駆け付け、遺体の収容に当たったのが中島であった。中島の献身的な活動により中村君のご両親はどれだけ慰められたことであろう。

昭子さんは、中村君の姉上であり、中島に憎からぬ思いを、また中島も同じような気持ちを抱いたことは想像に難くない。お似合いの夫婦が誕生したわけである。

今年の5月、いつものようにお互い山小屋を持つ大町で会った。私は、昔の仲間と立山・針ノ木スキーに。中島は（夫人に山懐まで車で送り迎えさせて）、単独で有明山に登りに出かけた。この日は5月2日、彼は肺がんで余命いくばくもないと医者から宣言された3日後のことであったとのことだ。

おそらく、この最後の山行を心の支えに、闘病生活に入るつもりだったのだろう。

それにしても、10時間ちかくかけ1人で登ってきた体力、気力は、半年くらいしか生きられないとされた病人のものではなかった。……

以上

石 弘光（いし ひろみつ、1937年4月 - 2018年8月逝去） 経済学者。専門は財政学。一橋大学名誉教授（第14代学長）、放送大学名誉学長（第6代学長）、中国人民大学名誉教授。オックスフォード大学客員教授、政府税制調査会会長



【1】『ひと・中島 寛の山と人生』その2

4. アンデス果てるところの山々

中島 寛 『山と溪谷』1979.7月号・山と溪谷社刊

4800mのアルティプレーノは、ヤマとアルパカの世界だ。人間は点景に過ぎない。褐色の荒涼たる広がり果てに、白い山なみがへばり付いている。1961年7月末のことだった。プヨプヨという小さな部落を出て、ヤマの踏み跡を辿り、赤茶けた急なガレ場を登った。小さな峠の上に立ち、ホッと一息ついた途端、いきなり、場違いの氷雪の山々が眼の中に飛び込んできた。それが幻のププヤ山群だった。

広大な高原のはずれ、アンデスの山々がアマゾンに落ち込む境界部にあるため、谷は深く、金属質の氷に被われた山々は鋭く、奇怪な相を呈していた。すぐ麓を何回も通っているのに、前山にさえぎられて、その片鱗すらうかがえなかっただけに、このときの驚きと胸の高鳴りを、今でもはっきりと思い出することができる。

それからの2週間の充実した登山もさることながら、幸運にも”地図の空白部”に踏み入る機会をもてたことが、その後の自分の山登りに大きな影響を与えたように思う。

初心に帰ろうとすると、今でも必ずこのときの感動に帰着する。(中島 寛著 一期一会の山、人、本より)



幻のププヤ山群が眼のなかに飛びこんできた。中村保・撮影。

5. 中島を育んだ山のよき先輩たち

甘利仁朗 氏 甘利先輩は時代の先端を行く先鋭的なアルピニストであった。学生時代から生活は山中心で、山への打ち込む姿勢は求道的であり、山のため大学は2年留年した。中島より4年上で、輝かしい山歴は雲の上の人であり、小太りながら俊敏で、身のこなしも軽く、腕力も強かった。しかし、登り方は慎重で堅実、ルートの選択眼も厳しかった。寡黙ながら情熱の固まりのような人で、言葉でなく行動で考えていることを示すタイプであった。中島たちは、甘利先輩の山に向かう姿勢に染まり腕を磨く。いわば、アンデスで甘利師匠に弟子入りしたようなもので、アイスクライミングではかなり技術的に困難が予想されたが百戦錬磨の甘利師匠に、皆、安心感を持って追随した。

この師匠は、ある谷のガレ場で石塊にまじってアンモナイトらしき大きな化石がいくつも転がっているのを発見し、温和な顔を緊張させて中島を凝視した。

「こりゃ大発見だぞ。学術的にも価値があるだろうが、日本に持って帰れば間違いなく高く売れる。売り先なら俺にあてがあるが、問題はどやって運び出すかだ。売ったら金は山分けということにして、力自慢のお前が担いで下ろしてくれないかな」。蛇に睨まれた蛙の中島は30kg以上の化石をザックに入れ、腰の抜ける思いをしながら2回も平原に担ぎ下ろし、甘利「山師」の千金の夢に加担することになった。馬の背からズレ落ちて馬が飛び跳ねるのを気にしながら、次に、トラックで運送、船で日本へ運び込む。結果は、敢え無くも、日本で学術的な陽の目を見ず、甘利家の庭石に格落ちした。

遠征は8ヶ月に及び、「地図の空白部」への初踏査と探検の喜びも多く、パーティはチームワークがよく楽しい遠征であった。中島にとっては、ここから、ヒラマヤへの窓が開かれたとも言える登山であった。

甘利氏はヨーロッパの3大北壁等より、中央アジア、シルクロード、天山山脈の方の魅力に取りつかれ、「楼

蘭」という会社を創り、福建省から日本へ初期の烏龍茶輸入(鉄観音)をやり成功した。アンデスの石よりうんと軽い烏龍茶の方が、確実な商売であった。これは中国の「山の神」の贈り物だろう。茶と引き換えに2人の息子を北京大学に留学させた。中国茶輸入で潤ったのは明治期の西徳二郎(ロサンジェルス馬術金メダルのバロン西竹一大尉の父)である。日清戦争後の枢密顧問官、外務大臣となっている。時の西太后は西公使へ御礼に日本への茶の輸出権を贈った。

中島の周囲には、後々、筏で太平洋を渡るとか色々な探検家の果敢な計画が舞い込んできた。冒険好きな、中島たちも、甘利先輩に声をかけて資金集めの応援をやったが、それらの計画は座礁し、水泡に帰した。甘利氏はかなりの額の応援カンパを海に流してしまい、中島は申し訳なく思ったという逸話もある。

札幌医大昭和37年卒業の原真氏は、66年アコンガクア南壁登攀、70年マカルー南東稜を指揮し、無酸素高所登山等で、日本山岳会の理論と実践の人と称されていたが、後の中島の逝去を「日本山岳会変革の為に もっと生きて欲しかった」と惜しんだ人物である。このドクター登山理論家は、「一橋大学山岳部の出身者で、日本の登山史に明確な足跡を残した人物が二人いる。小谷部全助と、甘利仁朗である。両者の書いた登攀記は、かつて私の熟読したもので、今も鮮明に憶えている。その他にも、翻訳や著作や編集に活躍した人は多く、山の世界では独特の一橋人脈を構成している。」と称賛を惜しまなかった。しかし、甘利氏は1995年7月、やはり、夢を残して、早過ぎる62歳の生涯を閉じた。

小谷部全助 ※→



※日本登山史上、不世出のクライマーと謳われ一条の光明を放って流星の如く散った。終戦直後、肺結核で32歳の若さで逝去。

((中島 寛著 一期一会の山、人、本より)



一橋山岳部初の海外遠征

1961(昭和36)7月

倉知 敬 中島 寛 中川滋夫 丸山則二 中村 保 甘利仁朗 吉沢一郎

経済学部3年 経済学部4年 経済学部4年三井物産 石川島重工 自営(副隊長) 電通映画社専務(隊長)

中村 保 氏 山岳界で、負けず劣らずの理論家の山男がまだ一橋にいる。甘利氏の1年後輩、中村保氏である。

アンデス登山隊の実質プランナーであり、言い出した中村が幹事役を務めることになったが、プカヒルカ北峰世界初登頂の達成感や未知の世界の体験で、「結果的に吉澤隊長や隊員の人生を狂わせてしまうことになったのではないかと打ち明ける。当時 57 歳で電通映画社の専務として実質的に同社を経営していた吉澤氏は、このために会社を退職することになってしまったからだ。吉澤氏は山に関する書籍を数多く翻訳しており、その収入はあったものの、「帰国後は山岳部の仲間が皆で吉澤さんをよく助けていた」と中村は言う。

1934 年生まれ。1958 年一橋大学商学部卒。学生時代は山に籠る日が多く、1年留年。ゼミナールの出席もままならず、そこは会計学の先端にあった番場嘉一郎教授と出身が同じ都立一商の誼で何とか切り抜け、厳しかった就職も先輩を頼って、石川島重工業に入社。海外プラント輸出業務一筋に頑張った。1968 年から1998 年まで、パキスタン・カラチ事務所長、中国室長、メキシコ事務所長、ニュージーランド事業部業務部長、海外プロジェクト部長、IHI 香港有限公司社長、石川島建材工業監査役を歴任。著書は『深い浸食の国』（2000 年、山と溪谷社）、『最後の辺境—チベットのアルプス』（2012 年、東京新聞社）、『ヒマラヤの東 山岳地図帳』（2016 年、ナカニシヤ出版）ほか多数。20代と50～80代山登りに集中した、**キセル登山家**というが、リタイア前後の登攀復帰が凄い。

ヒマラヤ山脈の東、チベット高原の東南に位置する峻険の連なる山岳地帯は、従来、政治的な理由もあって“最後の辺境”として取り残されている。中村は、この地に魅せられ、**30 年弱の間に 40 回も通い踏査**、雑誌や書籍を通じて報告を続けてきた。彼が“チベットのアルプス”と呼ぶ、6000m 級の未踏の秀峰を世に知らしめた功績は高く評価され、2008 年には日本人で初めて**英国王立地理学協会バスクメダル**を受賞。活動の集大成として『ヒマラヤの東山岳地図帳』を上梓。未だ元気旺盛、**88歳の現在**でも中国奥地、チベット辺りを歩き回る。日本山岳会名誉会員等を務め、国内外で講演活動を行う。

中村の活動は日本以外でも、国際山岳連盟(UIAA)名誉会員、アメリカン・アルパインクラブ名誉会員、アルパインクラブ(英国山岳会)名誉会員、ヒマラヤンクラブ(インド)名誉会員、ポーランド山岳協会名誉会員、ニュージーランド・アルパインクラブ名誉会員、王立地理学協会(英国)フェローと、多彩で今や、永年の功績で、日本より、世界で名を知られた登山家である。京都大学山岳部 OB(昭和38年卒、日本郵船)の伊藤寿男氏は、先般、編集子に、この中村保、ブラタジルで岸壁登りを共にした故中島寛両氏の「人となり」を熱っぽく語ってくれた。

中国・四川省の成都と、チベット自治区のラサ市の間、ヒマラヤ山脈の東側に位置し、サルウィン川、メコン川、揚子江の上流部分が併流するチベット高原の東南部一帯には、**約 270 座もの 6000m 級の未踏の高峰**が連なる。美しい峰々を、中村は“チベットのアルプス”と呼ぶが、今や世界の登山家にとってこれほど登攀意欲をそそられる未踏の山群は少ないらしい。この一帯には、19 世紀半ばから探検家や宣教師などが入って活動を行ったが、その記録はごく限られたものしか残されていない。未踏峰の大半を占めるニンチェンタングラ東部とカンリガルボ山城は、中国登山協会が著した地図でも“空白地帯”。その理由には、政治的な背景や地政学的問題(インドやミャンマーとの国境と近い軍事上の要衝で、中国人ですら近づけない)、そして地理的な困難さがあるようだ。歴史的に中国はチベットへの侵攻を繰り返してきたが、チベット東部のカム地方やアムド地方はチベットが激しく抵抗を続けてきたという経緯がある。外国人に対する未開放地域も設定され、入域が困難な状況となっている。地理的な問題は、高山地域であることに尽きるだろう。以上のような条件により、同地に入ろうという人は殆んどいなかった。中村は、2012 年 4 月に出版した著書『最後の辺境—チベットのアルプス』に、自らが世界で初めて同地区を詳細に紹介する成果を挙げた背景について、次のように記している(数年前に、一橋大学の広報紙 HQ が中村にインタビュー)。

1. 東チベットの未踏地域は、エベレストなどの有名な山城に比し世界の**登山家の関心**が少なかった。
2. そして外国人に**未開放、政治的理由でオフリミット**。開放地区に入るには、チベット自治区政府の公安局などの 3 機関と、人民解放軍西藏軍区の許可が必要、更に地元の公安局やチベット族の抵抗あり。
3. さらに、**険しい**うえに知る人もいないような山岳地帯の踏査には体力や精神力を要す。
4. なぜ、30 年弱にわたって 40 回も入域できたのか。現地人脈の協力だ。無許可で入域して公安に捕らえられ、ブラックリストに載ったこともあった。その窮状を現地の人脈で救われる。捕まった時は、中国人のエージェントやチベット族のガイドが 2 日間交渉してくれ、3500 元の罰金を支払って解放された。

その1年後に「政府のブラックリストに載っている。このままだと2度とチベットには入れない」との連絡を受け、リストからの抹消料として1万2000元をラサのエージェントに渡した。その後許可がスムーズに取れるようになった。また中村は、1990年からチベットへの遠征を始めた際、四川省の登山協会でいろいろと情報収集をしたが、成都で旅行会社を経営する人が「才覚と人脈がある人だった。26年来の付き合いだが、信頼できる男。彼がいなければチベット遠征はとてもできなかった」。このチベット遠征を、中村はすべて自費で賄っている。退職金を充当。登山界で有名となり国内外でよく講演を頼まれるが、最後の質問では決まって資金源とチベットへの入域許可について聞かれる。資金については、「スポンサーなどおらず全部自費で賄っている。それができているのは、環境に恵まれているから」と答え、入域許可については、「確かに難しいけれども、妻の許可をもらうほうがもっと難しい」と答える。



プカヒルカの途路標高 5,300m の C3 と C2 の地点、
右は中川滋夫氏、左は中島氏



6. 遅れて就職、大病、そしてエベレスト派遣の話

昭和35年頃、中島はゼミの親友、加藤幹雄と二人で、種瀬教授に大学院進学志望の相談をした。教授は、二人の経済環境を慮ってのことであろうか、はっきりと二人の希望を否定し、就職することを勧めた。そして、中島には、日立金属にいる知己の大学先輩を紹介してくれ、入社が決まったが、アンデス派遣から帰国して、昭和37年の1月、同期より9カ月遅れて入社した。二人とも自治会活動をやっていたし、社会主義経済学を学んだ学生は、採用に難色を示す企業も多かった。親友の加藤は住友金属工業に入社し、後に副社長として活躍する。

中島は、昭和37年1月に、日立金属株式会社に入社し、人事部勤労課に配属された。そして3月に、島根県安来工場に配属となったが、6月に腸間膜腫瘍切除手術で8月まで日立病院に入院した。翌年、昭和38年6月、今度は肺結核で国立中野病院に入院し、翌年の昭和39年3月、右肺上部区域切除手術を行い、9月に全快で退院、昭和42年1月、職場復帰で勤務再開となった。頑強であった中島は就職して2年間、まとめて大病を患ったことになる。

この日立金属には、エベレスト登山隊に選拔され退社するまで7年7カ月勤めることになる。後の『追悼中島寛』に日立金属の人物が3名、寄稿している。やはり、得難い大きな愛すべき同胞を得た喜びと、日本山岳会に選ばれてエベレストへ、中島を失うことの残念な思いが記されている。中島の師、種瀬教授の就職依頼の手紙を受け取り、入社の手配をしたのは一橋の先輩、長瀧氏であった。

日立金属・長瀧氏 彼は種瀬教授が学んだ杉本栄一教授ゼミナールの後輩で、種瀬先輩に格別世話になった人物であった。紹介の手紙には、「来年、私のゼミを卒業するゼミナリス滕の一人に中島寛という学生がいる。大変真面目な勉強の好きな男で大学の先生になりたいといっているが、自分の経験から、学者になるには或る程度経済的余裕がないと苦勞する。彼の環境からいって、種瀬自身としては学者の道を選んで苦勞するよりはしっかりした会社就職して自己を磨く方がベターだ」と彼にアドバイスした。幸い貴君の会社は日立から独立したばかりの若い会社だがユニークな将来性ある会社と聞いている。出来たら

貴君の会社で彼を採用して育てていただけないか。実は私は今度ハーバード大学留学が決まって近日中に日本を離れなければならないので敢えて唐突にこのようなお願いをする訳である」。私(長瀧氏)は直ちに人事担当のK 勤務課長(後の2代目社長)に報告、相談した。課長は即座に「優秀な人材ならお引き受けしようではないか。君と人事主任の案田君で彼と逢ってみろ」といわれた。数日後中島君が出頭した。目のギョロツとした、それでいて人なつっこく、訥々とした話し口調は朴訥重厚な山男といった感じの人物、というのが私の初印象であった。彼は来年4月から半年ほど南米アンデス遠征隊に参加したいと話した。会社にとっては前例のないことで困った。到底考えられない。しかし中島君の人柄にすっかり惚れ込んだのは案田主任。彼は「この学生は是非ともわが社で採りたい。そして自分が手許(人事勤務部)で直接教育してみたい」と熱心にK 課長に具申した。そして彼を採用し、入社を遠征帰国まで保留することになった。以来、中島君は退社する昭和44年8月迄の7年半、本社勤務部に所属、案田さんの下で、よい上司、よい友人に恵まれた。彼は幸福だったと思う。彼の人柄やタフな活躍ぶりに対する称賛を折々に見聞し、同窓の先輩として、大いに満足を感じた。昭和44年8月の或る日、中島君は日立金属退社の挨拶に私の処へ来た。私はすこし前から、退社の話は人事部長から聞いていた。中島君はこの頃までに、日立金属の将来を担う重要な人材の一人として成長していたのであるが、他方、会社の外の山の世界でも、日本山岳会が新たに計画するエベレスト登山隊の重要メンバーの候補に選ばれていたのである。しかし、この登山隊に参加する為には会社の仕事を犠牲にしなければならない。当時の会社では、海外登山のために会社を長期間休むのは許されないことであった。もし登山隊に参加するのなら、会社をやめなければならない。例外をつくるわけにはいかなかった。〈会社を取るか、山を取るか〉。中島君は随分と悩んだことであろう。「折角お世話になりながら、私の我儘で申し訳ありません」と彼は深々と頭を下げた。「自分の選んだ道なら、そこで最善を尽くしてください」。長瀧氏は餞別を渡しながらか「ここに驢と書いたが、これは永久の別れではなく再び戻ってくるという期待を込めた時の言葉だそう。そういう期待を込めながら貴君の健闘を祈ります」。中島は目をしばたたかせながら何度も頷いた。

しかし、彼は二度と日立金属に帰ってくることはなかった。日立金属は本当に惜しい人材を失ったのである。中島は長瀧氏にとって常に身近な弟のような感じを抱かせる存在だった。

会社を辞めた後も、長瀧や職場の旧友たちにもつぶさに便りを律儀に寄越していた。

日立金属・案田氏 昭和37年1月、同期に半年強遅れて入社した中島に惚れ込んだ。日立金属の将来を担ってくれるスケールの大きい人物が入ってきたと喜んだ。何をやらせても、論理構成が緻密で、ばつちりとデータを揃えしっかりした企画書を作ってくる。ゆっくりした口調で整然と論理を展開する。案田は3年所属を共にしたが、彼の将来への期待がどんどん膨らんできて楽しかったという。日立金属を切り回す男として中島を期待していただけに会社を辞めざるを得ないといった時にはショックが大きかった。

中島は案田の転勤先の安来工場まで挨拶に来て一晩泊まっていた。中島が長銀に行って、ニューヨークでも香港でも会った。変らぬ大きな中島寛さんがそこにいた。1998年9月19日が最後のお別れとなった。案田氏は東京衛生病院で静かなムードの中島寛と話した。

君すらも 越えざりにしか 萩咲きて 不死身の一生 静や下にかに行く

案田氏の惚れ込んだ、山道での歩きの速かった寛さんはあつという間に皆を置き去りにしてかけ過ぎたと嘆いていた。

同期入社の**岸田氏**は、2年間同じ勤務部で過ごした。登山と同様、事前に綿密な計画を立て、決めると一気呵成に遂行する中島。一方豪放磊落で底抜けの人柄の良さが持ち味で部内の旅行時、バスで皆酔っ払い、着いた軽井沢の旅館で相撲を取った。中島に投げ飛ばされたものが襖を突き破ったこともあった。中島はエベレスト後、長銀に入社しても毎年の「勤務 OB 会」に必ず出席して皆を喜ばせたそう。昭和47、48年頃、新宿の中島のなじみのロシア料理店で会食をやった時、岸田と、もう一人、荻窪の家に泊めて貰ったが中島夫人は次男のお産直前だったらしい。案田氏と共に、病院に中島を見舞に行くと、その時の次男が病室にいたとか、岸田は思い出して大いに恥じ入ったという。

普通は辞めた会社とは交流が消える筈だが、中島の人柄の大きさと毎年の「勤務 OB 会」は中島がいつも主役、亡くなる前の年までおばさんたちや皆にとりかこまれ、楽しそうにしていたそう。昔の日立金属の同僚たちは、皆を楽しませて、人生を豊かなものにしてくれた中島を終生忘れないだろう。

以上



【1】『ひと・中島 寛の山と人生』 その3

6. 懐かしき山の友・追想 中島 寛 「一期一会の 山、人、本」 より

(1) 山田亮三氏について

山田さんは18歳年上の大先輩であるが、気持ちの若い人だった。山岳部後輩で私ほど山田さんに世話になった人はいないだろう。私にとって大恩人であり、父であり、兄であった。

しかしそれ以上にかけがえのない山の仲間、同志であった。ソフトで柔和だが、内面は厳しい人で、山についても自分なりのちゃんとした尺度を持っていたし、人間と山との「響き合い」についても極めて繊細であった。

1988年 11月27日夜、息を引き取られた。瑞々しい情熱と夢を生涯失わなかったホンモノの登山家を失った悲しみは強かった。享年68歳であった。志半ばの山田さんの生命を奪った癌が憎い。

山田さんは著名なエコノミストであった。多数の著書もあるし、テレビ、新聞、雑誌に受けた時期もある。いくつもの研究所を作っては産業連関等の研究成果を世に問い、優れた後進を何人も育ててきた。

山田さんは自由人だった。常に組織に頼らず、自らの道を自分の手で築いてきた。経済評論においても現場の景気観や一般大衆の生活感覚に依拠した、ユニークな発想や視点を展開して評価を勝ち得てきた。孤高の闘いをしてきた人だが、人には言えないような様々の修羅場をくぐり抜けてきたに違いない。

しかし、山田さんはそういった過去の話を含くしない人だった。座談の名手だし酒が入って興に乗れば打ち解けて実に愉快だった。議論もするし時には喧嘩も辞さず、話の面白さは抜群だったが過去の自慢話や愚痴をこぼすことはまずなかった。台湾からウオッゼ島に転戦した戦中の経験について、何回聞いても話そうとはされなかった。

このように自分には大変厳しく頑固な人だった。しかしその分、自然に対しても人間に対しても謙虚であり寛大であった。それが山田さんの魅力であり、いつでも多くの人が山田さんの周りに集まっていた理由でもあろう

山田さんの山行歴のメモでは、14歳から66歳までの52年間の登山回数はちょうど500回で、登った山は611座、登山日数は1,373日になるが、万年筆の独特の丸い文字で丁寧に清書されている。

驚くのは、このメモと一緒に「これから登りたい山」に関する分厚いノートが残されていた。日帰り74コース、天幕69コース、南北アルプス周囲8コース、全てに、手書きの地図とコース、メモが付けられていた。辛い闘病のかたわら、地図と首っ引きで、ここを登ろう、あそこへ行こうと、夢を膨らませ、子供みたいに興奮していたであろう山田さんの姿を想像すると、思わず目頭があつくなってくる。登山歴を振り返ると、次の二つの時代に分けられる。

第1期 1934(14才)～1942年(22才) 一年先輩の大塚武(日銀理事～北洋銀行頭取)氏との昭和17年北穂高滝谷第四尾根の積雪期初登攀は登山史に残る快挙。その他、幾つかの登山史上に輝く登攀を成し遂げ、一流クライマーとして、急速に頭角を現した時代。

第2期 1966年(46才)～1986年(66才) 遠見尾根―五竜岳登山で復活し次々に仲間を増やし、行動半径を広げ、縦横に山田流登山を展開した時期。

上記、「学生登山」「シルバー登山」共に大変レベルが高くヴァリエティに富み中身も濃い。山田さんは戦前の青春時代のアルピニストの気分を晩年まで一貫して持ち続けた人だった。その後半生は、全て山を中心に回っていた。その契機に責任ある私は、一人の有能なエコノミストを失わしめたと批判を受けるかもしれない。この間に、公職を絶ち(1969年頃)、講演とテレビ出演も切り捨て(1976年頃)最後は残っていた大学教授の職も辞め(1985)全精力を山登りに傾注していった。ただ山を楽しむために、余計な衣を次から次へ脱ぎ捨てていったのである。その足跡は名文家でもあった山田さんの、針葉樹会報への15回にわたる寄稿によってよく知ることができる。

私自身が山田さんと一緒に登ったのは合計 27 回。山田さんとの山行は印象深いものばかりだが、それでも 1967 年山田さんが 47 歳の時に一緒に行った次の三つの山行が思い出深い。6 月谷川岳ヒツゴー沢、6 月滝谷から北穂高岳、10 月笛吹川東沢。谷川岳ヒツゴー沢は、一橋大ヒンズークシュ遠征隊を送り出して山田さんが僕の慰労のために企画してくれたものである。初めての二人だけの山行でもあり遠征隊の面々を肴にして、谷川温泉で徳利を何十本と並べ、その翌日ヒツゴー沢を登った。二日酔いを覚ますために滝壺に裸で飛び込んだりして、ようやくの思いで頂上に辿り着き一ノ倉岳から芝倉沢に下った。

山田さんはいわゆる蔵書家ではなかったが戦後の空白期間にも山の本を買い集めては丹念に読み込み登山の新しい潮流にも通じていたし、特にヘルマン・ブールとかボナティといった優れた登山家の伝記には大変な興味を持っていた。日本では大島亮吉を最も愛読していた。これらの山の蔵書を整理してみると合計 600 冊になり、散逸するのはもったいないので石弘光君の骨折りのお陰で大町のエコノミストセンターに「山田亮三 山岳文庫」として保存していただくことになった。結局山田さんの海外の登山は 1981 年のカナディアンロッキーだけだった。

あの戦争がなかったら、山田さんもヒマラヤ登山の第一線で大いに腕を振るい、小谷部さんの分まで頑張る立場にいた人だった。少なくとももう少し経てば、私も少しは暇が取れて、気心の知れたシェルパを連れて、私もサーブになって山田バラサーブと一緒にヒマラヤのトレッキングなど楽しめたのに、と悔いばかり残る。

(2) 中村慎一郎君について— 志の中に生きる

何人かの仲間を失っているが、そのたびにいつも思うのは「何でこいつが死ななきゃならなかったのか」ということである。ことに山での死という場合には、あつけない死に方をすることが多いのでなおさらそういう気持ちに襲われてしまう。慎一郎君が鹿島槍の天狗尾根で遭難したときもそうだった。

あの事故の翌日、佐藤、俵の二人と一緒に、最初に現場に駆けつけた時の光景である。

抜けるような青い空、輝く太陽、そして新芽の匂いに満ちた雪の中の樺の林、雪のクローアールに残る墜落の跡も、それこそ、子供が画用紙に何気なく一本の灰色の線をひいたといった感じだった。

しんと静まりかえった雪の尾根は、春の息吹が溢れていても、人くささなんてまるでない。一日前、たしかにここで一人の若者が足を滑らせて生命を落したはずだ。しかしどこを探しても何一つその痕跡を見出すことが出来ない。

私が慎一郎君に会ったのはたった一回だけである。1967 年の 11 月、山岳部恒例の OB と学生が部室で車座になって親しく酒を酌み交わす「月見の宴」のときだった。

たまたま僕の隣に座った彼と、短い時間の割にはいろいろな話をした。

「山にとっても登りたいんです。鵬翔山岳会(一般)にするか、一橋でやるか決心がつかないのですが、高校山岳部の先輩に進められて、一橋で基礎からみっちりやってみる気になりました」と言ったのを今でも覚えている。

その先輩というのが鵬翔山岳会の中心メンバー石黒君であることを、後から石黒君自身から聞いて知った。そういうことの言える良き先輩に育てられた慎一郎君は幸せであった。ふっきれたのか能弁になり、落ち着いていて大人びたところがあった。宴たけなわになり彼がビートルズの歌なんかを身振りも大袈裟に唄うところは無邪気で、僕は心豊かな気持ちになった。

山で死んではならない。山に登る人間は誰でもそう思い、自分に言い聞かせているにちがいない。一方、山登りに絶対安全な山登りは無いということも事実である。もし絶対に遭難を起こさない登山を目指すというなら、登山をやめる他ない。そういう性格のうちに登山の面白さも技術の進歩もあるのであって、登山をやるならそこから逃れ出る事はできない。だから、登山は、究極のところ、個人から出発し、個人に帰っていくものなのだろう。

山での死は愚かなことだといわれる。しかし、それなら山以外での死がそんなに高等だろうか。

何処で死のうが、死というものは常に悲しくむごたらしい。今の僕は、山での死をことさら別のものだと考えたり、感傷的になったりすることはない。1 年半の病院生活を送っている間に、僕は人間が死ぬ場面に何回となく出会ってきた。いつかは自分に順番が回ってくると覚悟しつつ……。期待と不安が交錯する、それでもニッコリ笑って手術台にのぼった隣人がそれきり帰ってこないときのうつろな気持ちは、味わった者にしかわからない。

死はいつも向こうからやってくる。少なくとも僕にはそう思える。山で死ぬことも悲しいが、山は怖いからと山をやめた友達が交通事故で死ぬことも同じように悲しい。

死を自分で律することが出来ないなら、生きることを考えた方がよい。生きるということはただ空気を吸っていることではない。それは志の中に生きることだ。やったこと、やれたことはどうでもよい。もし人間をはかる尺度があるなら、志の大きさ、深さしかないのではないのか。未知数の魅力、可能性の世界—慎一郎君の死を償うものがあるとすれば、生きている人間が、彼のそういうものを引き継ぐことしかない。



今僕は、ヒマラヤ山中3900mのタンボチェの丘の上で、ヒマラヤの山々目の前にしている。ここにはラマ教の、ゴンパ(寺院)が立っている。その様は、ヒマラヤの厳しい自然に対するささやかな人間の砦といった感じである。

ちょうど満月の夜だ。夕方出ている雲も谷に沈んだ。氷の塔そのもののタムセルク、城砦を思わせるカンテガ、奇怪なアマダブラム、その奥には衝立のようにそびえるローツェ、ヌプツェ、その上に頭を出している黒々とした世界最高峰のエベレスト……月光に照らされて静まりかえった山々をまのあたりにしていると、その量感がひしひしと迫ってくる。凄絶な美しさだ。ここには生と死が共存している。この世ならぬ世界だ。もはやあらゆる束縛から解放された慎一郎君がもしいるところがあるとすれば、こんなところに違いない、という気がする。

どうぞ安らかに！ (1970年3月24日タンボチェにて)

7. それから

新三木会編集室

－ 結婚、エベレスト第2次偵察隊の準備、

上記の中村慎一郎(新潟高校出身・大学2年生)は、昭和43年(1968)5月3日、鹿島鎗ヶ岳天狗尾根下降中滑落、即死、尾根下部の荒沢にて翌日4日、遺体収容。中島寛たちは、荒い獣のような息を吐きながら遺体を沢沿いに下し、大谷原(おおたんばら)まで運んだ。そこに新潟高校山岳部の恩師の姿もあった。(針葉樹会報告)一同、大町エコノミスト村の捜索本部に集結し、中島は新潟市での葬儀まで付き添ったが、中村の両親はその中島に深く感謝した。

その悲しみの中で寛は慎一郎の姉・昭子と心が通い、ふたりは1年後に結ばれ、昭和44年(1969)5月24日、結婚に到った。新潟の中村家は、大切な愛息・慎一郎を失ったが、愛息が憧れた逞しい先輩の寛を、新しい息子に迎えたことでどんなに癒されたことだろうか。媒酌の労をとってくれたのは山田亮三先輩であった。

そして、中島 寛と昭子夫妻は、埼玉県与野市の日立金属社宅に新居を持った。その頃、既に、日本山岳会は、本邦初めて、画期的な総力を結集してのエベレスト派遣隊のメンバーに中島 寛を選抜していた。

数年前に、第1次偵察隊はエベレスト攻略の基本的偵察を終えていた。69年に第2次偵察隊を派遣し、翌70年に本格的に制覇を狙うという計画であった。そういう計画のもと、1年以上、会社勤めをしながら、時には遠慮がちに休暇を取り、事前計画、実行準備に、アマゾン帰りの植村直巳(明治大学山岳部 OB)と二人で取り組んでいた。

(植村は、中島が60年安保闘争時に大学の自治会委員長であったことを知った時、この異人種に大いに驚いた。またエベレスト登攀史等、中島の博識にも驚いた。後日、共にエベレスト登攀中、氷河で発見した外国人遺体について、遺留品の「JAKE」のネームから、直ちに「63年春のアメリカ隊のジェーク・ブライデンバッハではないか」と判断した中島の知識に瞠目した。)

話は、その2年前のことに遡る。大学の大きなイベントであるから、簡単に触れておく。昭和42年(1967)夏、一橋山岳部は母校創立90周年を記念して、ヒマラヤの西の端、ヒンズー・クシュ山脈に登山隊を派遣した。肺結核手術後の中島は、後輩の平川紀男たちと後方支援の事務局を務めた。その平川は、中島の無理な注文に様々の苦難を乗り越えてよく後方部隊の勤めを全うした。派遣隊はサラグラール南峰、ウドレン・ゾム南峰、そしてノーバイズン・ゾムと三つの峰の初登頂に成功する。隊長は山本健一郎氏(昭和32年卒、証券会社の外国部次長)。

中島が高く評価していた後輩の平川紀男は、その後、卒業して、会社の仲間二人と前穂A沢踏替点直下のクレパスに落ちて遭難死した。後輩たちが一人を引き上げたが、滝芯部に挟まった残る二人は、危険をおかしながら、時間かけて、剛腕の中村が引き揚げたのは悲しい思い出である。(針葉樹会報)

話をエベレスト登山隊に戻す。仕事とエベレスト、中島は山を選び、会社を辞めることになった。7-2号に述べたように、8月20日、中島 寛は勤務先の日立金属に辞職願いを出し、退社する。僅かな退職金と銀行からの借金があったが、社宅も住めないし、1年半は無収入なので新婚の昭子夫人を、新潟の実家に預けることになるが、ま

るで出征兵士を送り出す如き新婚夫人の感慨や如何にという風情である。

日本山岳会エベレスト第2次偵察隊は8月20日、ネパールに向い、カトマンズから空路でルクラへ。そこからルクラBC(5400m)へ。そしてC1～C5まで漕ぎつける。中島のザイルの相手は一橋5年後輩の佐藤之敏(ユキシ、昭和41) 針葉樹会報第88号、1999. 4月

8. 69年エベレストと中島さん 佐藤 之敏(ユキシ、昭和41) 針葉樹会報第88号、1999. 4月

1. 中島さんの深慮遠謀

私が中島さんとザイルを組んだのは69年エベレストが最初で最後でした。

それ以前も、70年以降、私がヨーロッパに永住してからも、山以外でのお付き合いが中心でした。

中島さんには、常に一種の安心感と快い緊張感を同時に感じていました。彼の人間性に対する安心感、そして登山以外の政治・経済等の社会観その他を生き生きと語る彼に引き込まれて行くことの心地よい緊張感です。

それは彼が一貫して持ち続けてきた「若さ」と「円熟」と「リベラリズム」です。若い時分から、遙か年上の先輩にも深い信頼を受け、歳がいったからはずっと若い人たちと問題なく付き合えるといった人柄です。

これはまた69年エベレスト遠征隊でも、出身大学、年齢の違いを越えて、中島さんに求心力があった所以なのです。因みに中島さんは当時31歳、会長の宮下さん38歳、一番若い隊員は24歳、私自身は27歳でした。

私の69年エベレスト隊加入は、中島さん一流の情熱で他大学のOBと練り上げていたエベレスト直登という野心的な計画に、横から乗せて貰ったというものでした。それは日本山岳会へのネパール政府からの遠征不許可という事態が降って沸いた事件でした。当時、日本山岳会と「同床」だがスキーも内包する「全日本山岳連盟」の一部が、プロスキーの三浦雄一郎氏と組んで既に69、70年の登山許可を獲得しており、日本山岳会に対する確執・対抗心からネパール政府に圧力をかけて山岳会のエベレスト登山計画を阻止していたのです。

彼らは70年の大阪万博に絡み、サウスコルからのスキー滑降の映画と資金援助でネパール館を後押しするという条件で許可を獲得し、他の遠征隊を同時期に入山させないという口約束まで取り付けていたのです。

慌てた日本山岳会は元老・松方三郎氏を急遽ネパールに派遣したが事態は変わらなかった。当時私には外務省・文部省・NHK・毎日新聞といった組織が大々的に後援している事業がよりによって日本の他の隊の策謀によって座礁に乗り上げてしまったということがひどく不可解でした。

しかしそれより、驚いたことは、自分のような無名の若造に事態の転換任務を課したということでした。背後に中島さん一流の「陰謀」があったのは言うまでもありません。私はこの時、一橋山岳会の枠を超えた中島さんの影響力の大きさを改めて感じさせられた。たかがその2年前一橋のヒンズークシュ遠征に関して登山許可を取ったぐらいのことがエベレスト遠征委員会の人たちの気持ちを動かしたのではない。それを他でもない中島さんがもっともらしく言うからそうってしまったのです。中島さんには人を惹きつけて納得させてしまう不思議な能力がありました。ポストモンスーンにおける直登ルートを試登するためには、時間的にカトマンズ到着後2週間以内に遠征許可を取らねばならないという厳しい司令だったが私は意外に落ち着いていた。ここでも中島さんの心理的なバックアップがものを言っていたのです。NHK その他遠征関係者に見送られて羽田空港を発つ時に「ユキ、思う存分にやってくれ。失敗したら、などと思わないでいい」と言って手を握ってくれた中島さんの眼差しが交渉中もしばしば脳裏をかすめた。日本山岳会の為とかでなく中島さんと一緒にエベレストでザイルを組みたいという思いが許可取得への意欲を駆り立てていたと言っても決して言い過ぎではなかったのです。その意味ではパキスタンでの孤独の2ヶ月半、一橋の山の仲間と登れることを思い焦がれながら許可取得交渉の日々を送ったのと似ている。どこかに私を買い被ってくれた中島さんの、山岳会に対する面子を慮る気持ちもあったかもしれません

2 揺るぎない信頼

外務次官をはじめとするネパール側は、スキー隊が挙げる2隊が同時に登ることの危険性を繰り返し、69年7月には不許可という立場から一歩も引かなかった。しかし私は何回かの会談の中で、私の質問にどこか言葉を濁すような彼らの態度の中に、なんとなく万博援助を嵩に自国の山について外国のしかも民間人が指示を出しているという事実に対する苛立ちと屈辱感のようなものを感じ取った。そして万が一、目下の状況を覆す可能性があるとしたらそ

それは彼らにとって誇りある解決を見つけることだ、という結論に達した。そして全くスキー隊の虚を突く作戦を考え出した。「落胆するであろう私の仲間に納得してもらう為にも、最後にエベレストに関するあなたの国のエキスパートの意見を皆さんと一緒に聞く機会を作っていただけないでしょうか」という趣旨の文章をネパール政府に出す。当時エベレストに関するネパールの第一任者といえばブードルジェでしかいなかった。彼はすでにインド隊と一緒に通常ルートでのエベレスト登頂を果たし、いみじくもスキー隊のサダーに選ばれていた。そのブードルジェと公聴会の前に会っておく。彼をあらかじめ抱き込んでおくためではない。彼が本当に2隊が行くことは危険だと思っているのなら致し方がない。しかし万が一、外務省の担当官がブードルジェに対して例えば「ミスター佐藤も含めて日本山岳会の人達は2隊が行くことに対して全然問題がないと言い張っているが貴方はどう思いますか」といった調子で切り出してきたらまずい。権威と認められている人間としては、いや、そうとばかり言い切れない」と言いたい心理にかられるのが自然だろう。そうなれば万事休す。私はこちらの誠意とネパールに対する敬意の念、そしてネパール人の専門家から本当のことを聞きたいという真意の程だけはブードルジェに前もって知っておいてもらいたかったのです。この電撃作戦、勿論裏目に出るかもしれないが、山岳会の他の連中が何を言おうと構わない。相手国の感情を尊重したフェアな作戦であり、万が一これでダメでも中島さんなら理解してくれるだろう。ここでも中島さんの人格人間性に対する私のゆるぎない信頼が心の支えとなっていました。

ネパール政府は私の公聴会の要望を受け入れてくれた。その前日私はブードルジェをホテルに招いた。素朴で気持ちの良い男だった。そしてなにより嬉しかったのは2隊が行くことに関して彼が、何の危惧も持っていないということだった。我々はすぐに良い友達になってバーから私の部屋に移り夜更けまで痛飲した。公聴会は気味が悪いくらい期待通りに進んだ。しかも最後のひと押しとも言えるべきハプニングまで起こってくれた。会が終わりに近づく頃、しばらく席を外していた外務次官が顔を紅潮させて戻ってきた。

「東京のスキー隊から電報が入り日本山岳会のサトーという男がそちらに行っているが、間違っても彼に許可を与えるなど言ってきました。ネパールは小国かもしれませんが一国の民間人が我々に対してこんなことを言うとは…」と彼は絶句した。咄嗟に「スキー隊の代わりに我々が万博のネパール館を援助しましょうか」と言うべきかという考えが頭の中をかすめた。いやそれではまたもやこの国の人たちの尊厳を傷つけることになってしまう。

私は「スキー隊のたち人たちも私たちも貴国の美しい山エベレストに登りたいという気持ちに変わりはありません。是非私達2隊が仲良く登れるようにしていただけないでしょうか」とだけ言った。その瞬間、外務次官の目がみるみるうちに潤み、「是非そうしてください」と言って彼は私の手を強く握った。交渉は終わった。カトマンズに来てからちょうど10日目だった。ホテルに戻るのもどこかしくネパール外務省からの帰路中島さんに国際電話を入れた。一刻も早く中島さんの喜ぶ声を聞きたかったのだ。電話で何を喋ったか全く記憶にない。

3. ザイルを組む

1ヶ月後全隊員カトマンズに揃い、遠征が始まった。そして初めて中島さんとザイルを組む機会を得た。5500mから6100mにかけての危険な氷瀑地帯での二人だけの登攀。幸せだった。7000m以上は植村直己、小西政継と私たち二人の四人になってしまった。直登ルートでの登攀。食糧が著しく悪く、都会人クライマーの私は体重が急激に減ってしまったが、中島さんも私も高度順化が絶好で張り切っていた。やや肉が落ちて輪郭が角ばってきた顔に無精髭で、ますます精悍な表情の中島さんは黙々と登っていた。

そして11月1日。前日植村・小西組がほぼ8000mまで達した後を継いで、中島さんと私が7400Mの第4キャンプから最後の登攀に向かった。困難な直登ルートでの体力消耗による技術低下を避けるために早くから酸素マスクを使用するという隊の方針だったが、私のマスクが不調でゴーグルが曇り前方が見えなくなるので、ゴーグルとマスクを交互に外したりはめたりの煩わしい登攀だった。もし上から岩や、氷塊が落ちてきたら逃げ場もなく、2年前のサラグラール峰における池知君遭難のことが頭をよぎる。

午後3時頃、植村組の到達点に着く。上を向くと首が痛くなるような傾斜で岸壁が立ちはだかっていた。

10分間ほど休みを取りながらルートの選定を手短かに話し合う。既にポストモンスーンの冬が始まり、気温は零下35度、日は急速に短くなっている。急がねばならない。酸素はとっくになくなっていた。私はアイゼンの紐を締め直してから登り始めた。遅々たるテンポで5mほど登ってから下を見ると中島さんの姿が見えず1800M下の氷河まで一気に落ち込んでいて初めて恐怖感が体を貫いた。「ユキ、どうした。無理するなよ！」突然中島さんの声が響いた。我に返って再び登り始める。更に30メートルほどザイルを伸ばしただろうか。また中島さんの姿が見えるよう

になりホッとする。しかし周囲の岩壁空間の大きさとコントラストで中島さんがとても小さく遠くに見えた。突然私は中島さんとの間にハーケン1本しか 打ち込んでいないこと、そして夕闇が迫りつつあることに気がついた。私は中島さんにサインを送り、下がることにした。二人が疲労困憊で第4キャンプに戻った時はすでに真っ暗だった。その夜私は半雪盲による激痛に悩まされた。中島さんは自らの疲労にも関わらず食事を作ってくれたり私の目を冷やしてくれたりした。翌日第4キャンプの撤収と高差1200mの下降。この時も中島さんは半分目が見えない私をかばってくれた。

4 中島さんのセンス

69年エベレストは終わった。直登ルート8000Mまでの試登という目標は果たされた(直登ルートに最後まで残った当時の4人の調子からして通常ルートなら49年に既に登頂は可能であったと思われる)。翌年また戻ってきて中島さんと続きの部分を登れるだろうということに対して、私は何の疑いも持っていなかった。ところで私は植村直己と京大の井上君と一緒にナムチェバザールの村に残り冬を越して翌年の本隊到着を待つという「指令」を受けていた。しかしそれは越冬どころか、ネパール政府の許可が取れなくて遠征そのものが挫折せんという状況の中で口にされたことで、私はあまりまともに受け取っていなかった。8000mまで登っている人間にとって4000mにも満たない村での生活に高度順化の意味はないし、交渉という役割については既に本隊の分まで許可は取ってあったのだ。航空運賃節約の意味もあると聞いていたが、当時のお金で1億円の予算で、許可取得のためには募金の類も含めて金に糸目をつけないと私自信も言われていたぐらいだ(ちなみに許可交渉ではいわゆる贈り物はおろか一切の裏金は使わなかった)。

交渉のため他の隊員より一か月早くネパール入りをし、「都会的山屋」として一ヶ月半の登攀で10kg以上も体重を落とした人間としてはひとまず都会に戻りたかった。そんなわけでなんとなく他の隊員と一緒に日本へ帰ってしまっただけで、これが絶対服従を旨とする 体育会的伝統を持つ遠征幹部の神経を逆なでしたらしい。私は本隊選考から外されてしまった。私の誤算は一橋のリベラルな人間関係、登山スタイルを当然のことと考えていたところにあったのでしょ。植村直己が個人的にも私にそれとなしに漏らしたことがあるように、それはOBになってからも絶対服従を当たり前とする精神構造が支配する世界だったのです。「右も左も分からないのか、なぜ左に回った。この馬鹿野郎! 早くそこからまっすぐに正面の壁を登れ!」「ハイ、わかりました」(講談社ノンフィクション名作選の「朝焼けのゴジュンバ・カン」より)。植村が単独行を好んだのは、それがより困難な挑戦を意味したからだけではないということを理解している人間は少ない。因みに植村自身は年下の人にも威張らない大変優しい人だった。

アンデス(61年)ヒンズークシュ(65, 67年)といった海外遠征に限らず、国内の合宿、そして普段の人間関係においても一橋山岳会には常にフェアで洗練されたリベラルな空気が漂っている。中島さんと私の関係もそうであつたし、その意味では69年エベレストにおいても体育会的な先輩後輩関係に染まっている他の隊員の目にはむしろ奇異に映ったことであろう。私は一橋山岳会のこの体質がこよなく好きで、中島さんはまさにそういうものを体現した存在でした。さらに言うならば集団主義・権威主義に染まっていない中島さんのような人がいなかったなら私のような異端の若造による電撃交渉は勿論、69年70年のエベレストもなかったであろう。そして私は敢えて69年エベレストにはそこかしこに中島さんのセンスが脈打っていたと言いたい。

翌70年。私は全く別の件でカトマンズに舞い戻り、本隊の登山活動を終えた中島さんと会った。「ユキ、お前本隊に参加しなくて良かったぞ。出身大学の異なる幹部隊員同士のいがみ合いやら殴り合いやらで酷いもんだったよ」と吐き捨てるように言う中島さんの顔にはそれまで見たことのないような深い落胆と嫌悪と疲れがありありと出ていた。結局、それが為に大遠征隊を組んだ筈の直登ルートは早々に放棄され、**通常ルートからの登頂(植村・小西組)**に終わった。通常ルート隊の方に回されていれば中島さんはきっと登頂していたであろうことを私は確信しています。丁度30年後の今、私には69年に中島さんという素晴らしい人とザイルを組めたということが珠玉のごとく思われるのです。

以上

9. エベレスト南壁をめぐる個人的感想

中島 寛 「一期一会の山、人、本」より

エベレストは、変な言い方だが登れば登るほど頂上が遠くなるような山だった。

大きいということは総体的な概念だし、少なくとも”わかる”ものだと思っていた。しかし、エベレストの南壁を登っていて感じる大きさは、僕が30年間この世に生きてきた中で、僕が身体で感じ取ってきた大きな杵からはどうしてもはみ出してしまう。というよりは、まるで異質の大きさといった方がいいかもしれない。

歩一歩登っていけばいつかは頂上に着く、人間とモノをどんどん投入していけば何とかものになる、技術さえ磨けば登れる……、そういったことではどうにもならないという絶望感、いらだたしさ。もっと根源的な何ものかを問われている。大げさに言えば自分の思想が試されている、といった感じだった。

今回の第2偵察隊は準備の段階で随分スツタモンダの紆余曲折があったけれど、宮下隊長以下12名(うち報道4名)というメンバーで、BC帰着まで45日間(日本を出てから帰国まで98日間)、終始楽しい山行をすることができたのは幸せだった。偵察隊というのは、登頂といった義務づけられた目的がないだけに気が楽だが、それだけに、かえって難しい問題が多く、ことに今回は、未踏の南壁をできるだけ登って、その登頂の可能性を明らかにしてくるというテーマを持って出かけただけに、かなり厳しい山行であった。結果的には四人の隊員が8000メートル地点に達し、高距離400mの頂上岸壁を突破するルートを、三つないし四つ見つけてくることができたわけだが、正直なところ、あと848mというよりは、これまでとは”異質な848m”がそこにデンと腰を据えていると言った印象の方が強い。僕達はようやくの思いで、フィックスドロープを2190mも張って8000mに到達したけれど、エベレストの南壁を登って頂上に立つためにはまさに、この地点から始まる400mの頂上岸壁をどうこなすかが最大のカギであって、僕たちはそのほんの足下に達したに過ぎない。(メンタリティーの面においても)

エベレスト南壁登攀の難しさはまず第1に、何をにおいてもエベレストの高さが8848mだということにある。ここから発生する問題としては、①頂上岩壁を突破した8400~8500m地点に最終キャンプを設ける必要がある、②高度衰退の起る6600~7000m以上の高度でのルート工作が円滑に行われるよう、どんな岩場でも、テントを張って横になって眠ることが必要であると、といったタクティクス上の問題がある。第2の条件は8000mから上が全て岩壁登攀になる、ということである。この点に関連して、①軽量で有効な登攀用具の開発、②岩壁における荷揚げ方法の合理化、③酸素を使用した岩登り技術の開発、といった問題が当然おこってくる。そして、第3に、これが最も重要なことだが、こういった問題を解決し、全ての条件を登頂に結びつけていく主体としての組織及びチームの編成をいかにするかという要素がある。これらの要素は、それぞれ絡み合っているけれど、相矛盾していることが多く、その意味で、これをエベレストの頂上に立つという単純な一点に焦点を合わせて統一していく、タクティクスの持つ意義が特に重要になってくると思う。

今度のエベレスト南壁を真剣に考えるようになるまでは、僕自身、積極的にこの問題を考えることはなかったが、そういう目で過去のヒマラヤ、アンデス、アルプスの記録を眺めてみると、タクティクスの中に、そのチームの基本的な性格とか思想が最も集約的に表現されていて、非常に興味深く思った。最近では日本隊のヒマラヤやアルプスでの活躍が目立ち、日本人クライマーの国際的な評価が高まっているかにみえるが、タクティクスという面ではお粗末そのものというのがあまりにも多いのではないだろうか。そしてこのことはいくら体験を積んでも、簡単に身につくものではない。もっと本質的、主体的な問題をはらんでいるように思われる。すでに39人のメンバーが決定し、先発隊が出発した現在、このプロジェクトも最終段階に入ったわけだが、この一年間、準備活動に加わって、毎日の生活のほとんどをエベレストと共に暮らしてきた一人として、思うこと多く、やったことのあまりにも少ないのが残念である。この遠征そのものが、最初から最後まで全て試みであり、実験である。僕がこの計画に加わることを決意した時に最も惹かれたのも、この計画が単に世界最高峰に登る、というものではなく、全くこれまで試みられたことのない一つの試みだと感じたからである。

成功とか失敗とかの評価も、そういう目で見直すことが最も必要ではないかと思う。

試みというものには、失敗の危険がいつもついてまわる。やるかやらないかを決意するときが最大の冒険である。誰がいったか忘れたか、確かにそれに引き続く実行の段階は冒険というよりは探検である。冒険とは縁もゆかりもない、むしろ全く対極の煩わしい作業の連続である。決意の瞬間に比べれば、ある場合は山登りさえも。しかしその長い馬鹿馬鹿しいことを通り抜けなければ冒険は冒険たりえない。ここにいわゆるエクスペディションの面白さも、やりきれなさもあるのだと思う。しかしそういう形でしか表現されないエネルギーを、最も有効に最も力強い形で蓄積するような組織とかチーム。それを作ることは今後の課題として残されてしまった。僕自身の問題としては今後の問題は全てここから出発するほかないし、出発していかなければならない。

10 小谷部全助と甘利仁朗、ジョン・ハーリン II

中村 保 (昭 33 卒・針葉樹会)



中島は、アンデス遠征隊でパーティを組んだ中村先輩の背中をよくみていた筈だ。後に世界の山岳界に、大な貢献を為す中村氏の周到な調査脳力、プランナーの資質、そして大きな心を学んだ筈だ。(編集子)

針葉樹会報の中島寛君追悼号に、2009 年に亡くなられた原真さんが、一橋大山岳部は小谷部全助、甘利仁朗と中島寛の三人の傑出した登山家を輩出しているとしている。原さんは 1970 年に日本山岳会東海支部の**マカルー登山隊**の隊長として東南稜経由での第2登をリードした。同年に中島君は日本山岳会エベレスト登山隊のメンバーで南西壁の初登攀を目ざした。ヒマラヤ登山の黄金時代の幕開けの時期に二人は日本の登山界をリードし、原さんは中島君の人間力、見識、統治能力を高く評価していた。小谷部さんは日本の本格的なアルピニズムの体現者としてお手本的な存在だったろう。甘利さんとの接点は知らないが、前穂北尾根四峰正面壁から始まり第二次 RCC での積雪期初登攀の活躍が眩しかったのだろう。

小谷部さん森川さんが夭逝しなかったら、戦後のヒマラヤ登山で主役になっていただろうか。日本のアルピニズム史上に燦然と輝く北岳バットレス、鹿島槍荒沢奥壁、前穂高岳東壁の積雪期初登攀は 1930 年代の後半になされた快挙で、ヨーロッパではアルプス最後の課題、三大北壁の初登攀が競われていた時代である。1938 年にアイガー北壁、グランドジョラス・ウォーカー稜が登られ競争に終止符が打たれた。森川さん、船本さんが前穂高岳東壁積雪期初登攀に成功したのがこの年である。第二次大戦の暗雲が覆いはじめ登山どころではなくなっていた頃である。当時、すでにヒマラヤ登山に目を向ける大学山岳部が多かったが、小谷部さんは日本に残されている未踏のルートへのチャレンジこそアルピニズムの本道であると一途に実践した。小谷部さんの思索と行動そして執念は時代を経ても色褪せることはなく、信奉者は少なからずいるはずである。

戦後まもなくはアルプスカヒマラヤか、クライマーの一つの命題でもあった時期があったが、大勢はヒマラヤに向かった。ヒマラヤの 8,000m 峰が次々に初登頂され、1960 年に難峰ダウラギリ I 峰がスイス隊の手に落ちた頃、ヒマラヤには目もくれずアイガー北壁直登ルートの開拓に執りつかれたアメリカのクライマーがいた。ジョン・ハーリン II である。彼はアメリカからスイスに移り住んでアイガー北壁直登(ディレティシマ)に賭けた。何度かの挑戦の後、1966 年 3 月、速攻アルパインスタイルの英米合同隊(リーダー:ジョン・ハーリン II)と物量作戦のドイツ隊との競合になり、最後は英米合同隊からドゥーガル・ハストンだけがドイツ隊に合流して完登した。途中でジョン・ハーリン II が墜落死する。英米合同隊にはサポートとしてクリス・ボニントンも参加、ドゥーガル・ハストンは 1975 年にボニントン率いる英国隊に加わりダグ・スコットとともにエベレスト南西壁を初登攀する。中島君が 1970 年のルート・ファインディングについてボニントンに電話でアドバイスしたことが役立ったかもしれない。

ジョン・ハーリン II の志と悲壮な最期は、息子のジョン・ハーリン III(中村の友人)が『アイガーの執念 (*THE EIGER OBSESSION Facing the Mountain That Killed My Father*)』の中で感動的に書いている。ジョン・ハーリン III は 2003 年からアメリカン・アルパイン・ジャーナルの編集長をしており、私の「ヒマラヤの東チベットのアルプス」世界の登山界に大々的に発信してくれた得がたい友人である。『執念のアイガー』には父親の登山観が書かれ家族にたいする思いが切々と語られている。アルプスに殉じたジョン・ハーリン II と小谷部全助、なんの繋がりもないが、ヒマラヤ以前に己のクライミングの思想と美学を実践したという点で相通じるところを感じる。2010 年 4 月末にイタリア山岳会での講演のために訪れた際に、トリノの国立山岳博物館 (Museo Nazionale della Montagna-Duca Degli Abruzzi) を案内してもらった。世界一の山岳博物館と自慢するだけの立派なミュージアムである。そこにはワルテル・ボナッティーがアルプスでの初登攀時代に使った登攀用具が展示されていた。翻って、私が知る限り、小谷部さんの記念の用具はどこにも展示されていない。かろうじて「山日記」が大町山岳博物館にあると聞く。登山文化の継承と言う意味では、しっかり根付いているイタリアと風化が進行し閉塞状態にある日本の登山界とは比べられないが、日本山岳会いや一橋山岳部が小谷部全助という稀有のクライマーに居場所を用意していないのは寂しい気がする。日本山岳文化学会の砂田定夫さんが 2009 年 12 月 28 日付 **小谷部全助・『山日記』に見る山行の軌跡** という 23 頁の小冊子を出しているが、針葉樹会の会員の手になる登山界にアピールできる著作が欲しいものである。

小谷部さんと甘利さんを同じ目線で書くのは難しい。甘利さんについては一橋大山岳部の記録に残されていない登攀、部外の仲間が見た甘利像を綴ってみたい。高校時代は立川高校山岳部、卒業後(一橋大入学)その OB 会である紫峰山岳会に所属して水島、永光両氏と四峰正面壁に傾注した。では、立高山岳部時代はどうだったか、山岳部の創設者である慶応 OB 会、登山会の重鎮、田邊壽さん(1960 年ヒマール・チュリ 7983m に初登頂、元日本山岳会副会長、元ダイエー・ホークス社長)に訊いてみたところ意外に冷淡な返事が返ってきた。甘利さんが部に在籍していたかどうかの記憶はないし、一緒に登ったこともないので何も話せることはないとのことであった。七回忌のとき四峰正面のザイルパートナーの水島さんは「甘利はいつも一番でなければ気が済まなかった」と挨拶の話を聞き違和感を覚えた。一橋山岳部では、登山経験があるということで別格扱いだったし、紫峰の仲間と四峰正面を追い続けた。では、何時どこで短期間に優れたクライミングの技術を習得したのか。アスリートのような締まった体形ではなく、小太りのずんぐりした体つきにもかかわらず、柔軟に無理のない身のこなしで登ること

ができ、登攀中は常に精神的にもタフで冷静だった。クライマーとしての天才的な資質を備えていたといわざるをえない。そして、外面は天真爛漫に見えたが、感性豊かでユニークな発想をする人間だった。

この原稿を書くにあたって、永光さんに紫峰ニュースレター別冊甘利氏追悼号(1995 年2月『空白の登攀記—甘利との奇妙な登攀』)を送って頂いた。甘利さんを四峰正面壁に誘ったのは水島(東工大)と永光(北大)のお二方だと記し、第二次 RCC での活躍に触れた後、『空白の登攀記』が語られている。さわりの部分を引用する。

「1958 年。彼との山登りは海外遠征を意識したものになりつつあった。そんな二人を駆り立てて登った山行の中で、今でも記憶しているのは残雪期の鹿島槍荒沢奥壁、真夏の前穂中又白、一の倉滝沢下部の登攀と幾つかのスキー山行である。記録としては何処にも発表されていないと思う。その中で強烈に脳裏に焼き付いているのは一の倉滝沢下部の奇妙な登攀である。」「それは 1958 年の 6 月のある週末だった。甘利の発案で滝沢下部に登山靴で登ろうというものだった。彼の論拠は‘アンデスでヒマラヤでも草鞋はないよネ’というものだった。土曜の夜行で上野を発ち、快晴の烏帽子沢スラブを登り、本谷バンドで一服したことを覚えている。さてアンザイレンという段になって、甘利が爆弾発言をしたのである。‘ノー・ザイルでどう?’ 今様のフリーで登ろうと云うことである。仰天したのは云うまでもない。こちら是一年間の岩登りのブランクがある。甘利はその年の冬と春に荣誉ある初登を二つも成し遂げ油がのっている。一瞬躊躇逡巡する私に甘利が追い打ちをかける。‘昔はニルンゼを鉋靴でノー・ザイルで登ったんじゃないの?’ 甘利への対抗心もあった。二つ返事で OK をしてしまった。」

「滝沢下部の横断バンド、多分、鉢巻した甘利が先行したのだと思う。下り気味でじめじめした幅の狭いソングの下の厭らしい草付、膝がガタガタと震えだしたり、切れたバンドから次のバンドへの捨て縄にすがっての乗り移りは、肩が抜けそうになったりと、今でも時々夢に見ては油汗が出る。平衡感覚が異常だと自認する甘利はスタコラ歩を延ばす。遅れてはならずと息をはずませて後を追う。三つバンドをトラバースし、最後は甘利得意の十八番、アブミ三段活用で無事に滝の落ち口に立った。甘利は例の口癖で‘へっへえ、やったね’とご機嫌だった。」

「広川原で昼寝をし、B 沢にはいった。国境稜線から大入道が現れたと思うと一天俄かにかき曇り大粒の夕立が降り始めた。雷は鳴る、閃光が閃く、沢は増水、たちまちにして滝の連続となった。午後三時、これ以上登れない。そこで初めてザイルを引っ張りだして、甘利自慢のハーケン陣を組んで、ぶら下がってのビバークとなった。翌朝は再び快晴だった。水だけ飲んで早く行こうぜとせかすと、甘利は‘まあ、ゆっくりやりマッショ、慌てる乞食は貰いがすくない’と。国境稜線に出ても甘利は大人の風格そのままのんびり歩くのだった。新入社員の私は無断欠勤を会社に一刻も早く電話しなければならない。甘利を尻目に西黒尾根を駆けだした。ザンゲ岩まで下りると、下から登ってくる女性がいた。一瞥して‘あつ’とまたまた仰天した。その人は、後の若き日の陽子夫人だったのである。あの甘利が、野郎メ。洒落たことをしやがる、道理で‘慌てる乞食’の台詞をはいたのか、と合点しつつも、地獄に仏とばかりに、甘利のために用意してきた握り飯とお茶を遠慮なく頂戴した。」海外遠征を旨とした二人は、甘利さんは 1961 年に一橋隊のアンデスへ、永光さんも 1962 年に北海道大学チャムラン(7319m)登山隊に参加する。

以上

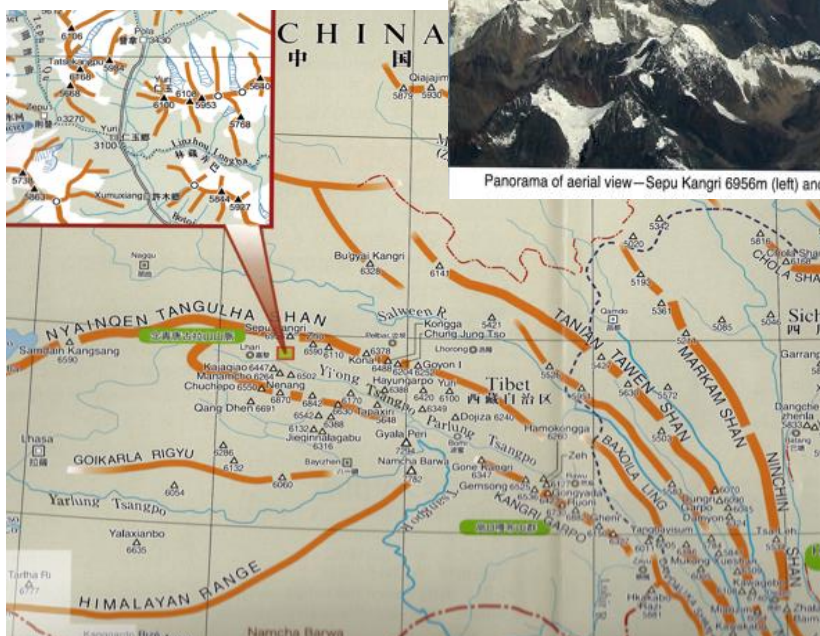
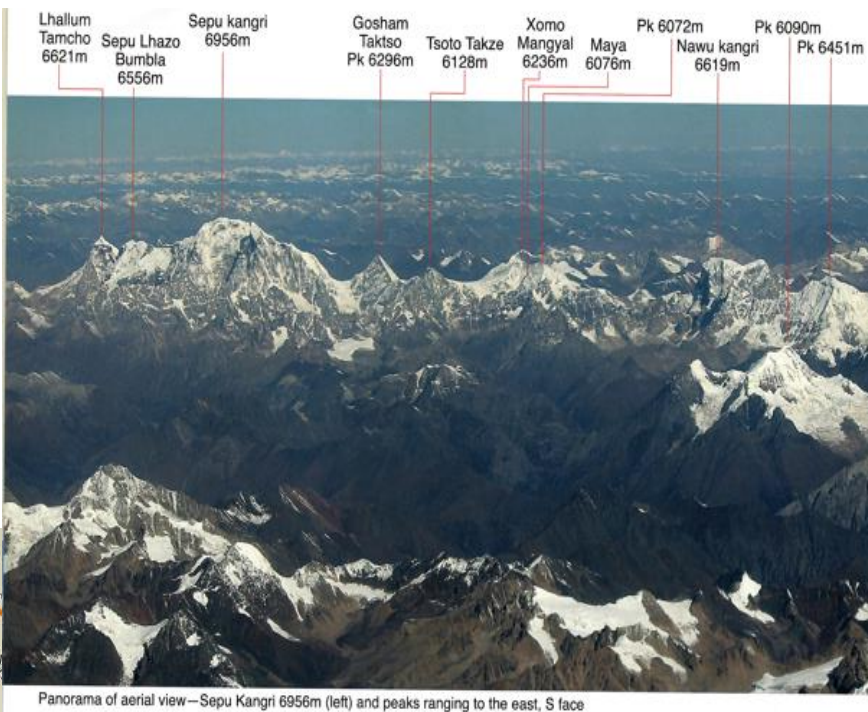
中村 保 氏

会報(7-2)に紹介。

昭和 9 年(1934)生まれ。(現在 88 才)。昭和 33 年(1958)一橋大学商学部卒。石川島重工業プラント輸出部勤務。昭和 36 年、一橋アンデス登山隊のプランナー、登頂。50 代の中国在勤時を主に、ヒマラヤ山脈の東、チベット高原の東南に位置する峻険群の紹介、地図等の作成、出版をライフワークとし、世界的に著名。



前頁写真は、中村 保氏の著作の一部である。中国駐在時より、これまで30年弱で自ら40回も入山し、チベット以東の地図なき山岳を調査。英中日3か国語による写真を含む詳細な山岳地図を作り上げ、世界の山岳プロ、愛好家に提供してきた。政治、地政学的制約の多い、この残された秘境は、踏査の進んだネパール、ヒマラヤ山域から、世界の岳人の関心を惹く垂涎の6千m級、3百座の未踏峰、山群を写真で紹介。多くの詳細地図も加えて好評を博している。



East of the Himalaya Mountain Peak Maps

＝ヒマラヤの東 山岳地図帳 (当頁写真)

2016/1 刊 日本山岳会創立 110 周年記念出版

深い神職の国-ヒマラヤの東 地図の空白部
を行く 2000/11 刊 山と溪谷社

チベットのアルプス 2005/3 山と溪谷社

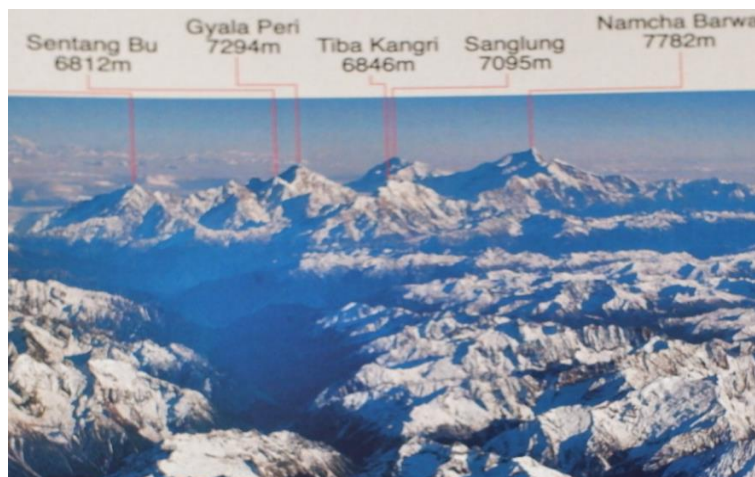
上記3部作・第6回秩父宮記念山岳賞受賞
2008 年には日本人で初めて英国王立地理学
協会バスクメダルを受賞



怒江支流・玉曲の息を呑む壮大な峡谷

The Japanese Alpine Club JAPANESE ALPINE NEWS
Pioneering Expeditions, Notable Ascents & Adventures and
Scientific Field Research

日本山岳会より、15年間、海外向けのジャーナルを発行。
海外の約800の団体個人に配布した。





『ひと・中島 寛の山と人生』 その4

(1) エベレスト遠征隊の経緯

新三木会編（針葉樹会資料提供）

中島 寛が参加した日本山岳会のエベレスト遠征は、1969年(昭和44年)第二次偵察隊と1970年の本隊である。それ以前、日本山岳会は、戦後の大きなイベントとして1956年(昭和31年)5月9日、に榎有恒隊長のもと、第三次登山隊がマナスル初登頂(標高 8,163 m、世界 8 位)に成功している。

次に、永年の夢であった世界最高峰・エベレストを目指すことになる。これは、昭和38年以降計画を温めていたもので、明治38年創立の同会にとっては最大の記念すべきイベントとなるものであった。但し、昭和40年3月にネパール国はヒマラヤ登山許可を停止することになり、昭和 44 年 4 月に入山許可を得るまで計画は停滞した。

昭和44年4月に許可取得後第 1 次偵察隊が 4-6 月のプレモンスーン期にシェルパ等の質と数の調査、アイスフォール登路、南西壁取付き点確認等の調査を行った。1 次隊帰国後、翌年の本隊と同時期に入山が予定されている三浦スキー隊との調整等を、ネパール政府と交渉すべく、7 月に佐藤之敏(一橋大 41 年卒)が派遣され、難交渉の末、偵察隊、本隊の正式の登山許可を入手した。第2次偵察隊は宮下隊長以下、中島、佐藤、小西、植村が中心となって世界未踏の南西壁の取付き点調査、試登を進めて、冬の迫る 10 月末に、2パーティー(植村・小西組と中島・佐藤組)が南西壁上に 2 つのキャンプを伸ばし、8千mを越えた。しかし、ポストモンスーンの気象等に阻まれて下山したが、翌年の本隊に向けて貴重な課題、経験を持ち帰った。翌年、中島は、本隊隊員にも選ばれて南西壁からの再挑戦を行なったが、またもや、気象条件や落石等に阻まれ、南西壁挑戦は断念された。後に植村、松浦隊、平林隊員がより確実性の高かった東南稜(サウスコル・ルート)からの登攀に切り替え、大部隊派遣の面子を果たした。中島等は、その後も、より困難を伴う未踏の、南西壁からの登頂に執着し、構想を練るが 1975 年のダグ・スコット他の英国隊の南西壁からの初制覇を果たし、その後の挑戦は断念した。

(2) 中島の再就職—長銀・竹内宏氏の回想 経済評論家、元長銀総研理事長(1930 年 9 月-2016 年 4 月)

「追悼 中島 寛 天地ある限り」2000. 10月発行 より

私は数年前、日本山岳会のエベレスト登頂のテレビ特集を興奮して見ていた。中島さんが尺取虫のように張り付いて未踏頂の南西壁をよじ登る姿には息を呑むような緊張感があつた。中島さんは遂にイエローバンドにまで達し、南西壁の最高記録をつくった。私は旧制静岡高校時代に山岳部で生活したが挫折したので、天才的なアルピニストには強烈な憧れを持ち続けていた。南西壁隊の中島さんや東南稜隊の植村直己さんには、大いなる尊敬の念を抱いていた。その中島さんがエベレスト遠征の翌年、平尾さんの紹介で私を訪ねて来るという、感動すべき出来事だった。あてにしていた再就職先が思うようにならないので「しばらく文筆で生活したい。雑誌社を紹介してくれないか」ということだった。

私は思い切って「長銀に来る気はないか」と誘ってみた。彼はしばらく考えて「お願いします」という返事だった。当時、日本経済に於ける東南アジアの資源開発投資が活発になりつつあり、調査部では、東南アジアの経済や資源の調査を考えていた。ところが東南アジアの資源地域は未開発地域が多く、調査のリーダー、スタッフがいなかった。ヒマラヤ帰りの中島さんほど資源調査に適した人はいない。彼の登山実績、総合的な判断力を必要とすると山で超一流の人は調査でも超一流になれるはずだと部内の上司たちを説得した。

H 専務は登山家で、本当にそんな立派なアルピニストなら有難い、と予想通りの返事、私は誇らしげな気持ちで中島さんの保証人になり、彼は入社すると海外調査担当になった。中島さんの体力と気力はとにかく人間離れしていた。国鉄ストライキ時、彼は大宮から歩いて出勤。大手町から霞ヶ関の大蔵省や通産省までの用事は、駆け足で行く。真夜中近くまで仕事を続け土曜、日曜にはサッカーの練習に小金井のグラウンドで、10 歳近く年下のサッカー一部員に混じって練習し、レギュラーの位置を獲得していた。入社後2年の頃、ハーマン・カーンのいたハドソン研

研究所の研究者と親しくなり、アルジェリア政府の委託研究の仕事を取ってきた。その内容は、国営企業の設備投資計画の診断と、アルジェリア経済を日本に紹介する本を作成することであった。

彼は海外遠征の時のように綿密な調査計画を練り上げた。アルジェリアはフランス圏であり、現地調査の通訳は現地に近いソマリ日本人元全共闘運動家3名を調達、長銀のプロジェクトメンバーは4回、延べ180日間アルジェリア出張したが、いずれもこの通訳を使った。元学生運動のリーダーたちは頭脳明晰、名通訳、優れた調査アシスタントであった。通訳たちは中島氏を人格的に尊敬していたので、彼の指示でよく働き、一人は後にアフリカ研究で有名になった明治学院大学教授になった。受託調査は順調に進んだ。

終盤に長銀の副頭取も参加し、アルジェリア現地での調整を重ねた。すべて中島さんの周到なシナリオで進んだ。アルジェリア側との会議には中島さんが進行を全て仕切り、副頭取に対しても、例えば、挨拶は5分にしてくださいとか、天然ガス開発の話が出たら、長銀は関心があると言ってくださいとか指図する。最初の頃、副頭取は「俺が副頭取なのに、なぜ中島君の指図に従わなければならないのか」と盛んに文句を言っていた。ところが毎朝起きると、ドアの下に中島資料が投げ込まれている。そこには前日の会議の要約、残された問題、今日議論すべきこと、今日面会する相手の特徴などがびっしり書き込まれている。

アルジェリア側の窓口はエネルギー工業省であるが、委託した研究のあるべき内容については曖昧で、しっかりした考えを持っているわけではなかった。だからこそ委託研究を発注したと言える。従って、調査を開始すると研究内容についての要求が毎日少しずつ変わってくるのは当然であるが、こちらとしては付き合いきれない。中島さんは相手方との会議録を作成し、その都度、英文にして翌日、相手側からサインを取ることにした。その議事録を2通作り、アルジェリア側の部分のファイルを作って、NB エネルギー工業省に渡した。会議の時に双方がそれを手元に置いておけば、アルジェリア側が自ら出した要求を認識できる。

先方の、エネルギー工業省の美人秘書が毎日、嬉々としてその資料をタイプで作成してくれるので、長銀側の皆は「どんなお土産を差し入れたのか」と不思議に思った。しばらくすると副頭取はすっかり中島さんを信頼し、進んで中島さんの指揮下に入り、彼の要求通りに話し、行動し、不安な時には中島さんの承諾を得てからアルジェリア側の質問に答えたりした。中島さんの調査結果はアルジェリアの経済開発という400字詰原稿用紙700枚の分厚い本になり、アルジェリア政府の負担によって日本で出版された。この本は、以後、長い期間、アルジェリア経済を本格的に研究する人にとって唯一の参考書となっていた。専門の経済学者である名古屋大学の飯田経夫教授と、日刊工業の優秀な経済記者、松本氏に、その協力をお願いした。

飯田経夫教授は後に、後に、名古屋大学経済学部の雑誌に寄稿された際、アルジェリアにおける中島さんの行動を賞賛し、「日本の銀行には、N君のような劣悪な条件下で素晴らしい調査を行っている人がいる。学界も見習うべきだ」という趣旨で結んでいた。中島さんのアルジェリアプロジェクトによって長銀はアルジェリア政府から深い信頼を受け、エネルギー資源開発の投融資案件では日本の銀行を代表する役割を担うようになった。エネルギー工業省の何人かの役人は調査が終わった後も中島さんと交際を続け、そのうちの一人は夫婦で来日し、中島さんと一緒に拙宅を訪れてもらったこともあった。素晴らしい人材を中途採用させたというので、長銀内における私の評価は非常に高まった。私の長銀に対する貢献は中島さんの入社だけだと言われたものだった。

(3) いつも何かをやる人 飯田経夫

名古屋大学名誉教授（1932年9月～-2003年8月）

（追悼 中島 寛 天地ある限り 2000.10月発行より）

私と中島さんとのご縁は1974年夏、当時の日本長期信用銀行調査部がアルジェリア経済調査を行った時にそれに加わったことである。私は、その前に、70年過ぎ、国際協力事業団(JICA)の派遣でインドネシア政府に勤務して帰国直後だった。当時は、そして今でも私のような大学エコノミストが技術援助の現場で働くことは大変珍しかった。そこで、竹内さんはアルジェリア調査団に私にも参加の声をかけてくださった。喜んでそれに参加した私が幸運にも中島さんに巡り合ったというわけである。アフリカ大陸に足を踏み入れるのは私にとっては初めての経験だったが、中島さんに巡り合ったことを含めて真に貴重かつ強烈な経験だった。ともかく精力の塊と言うか素晴らしい人だった。ともかくいつも何かをやっている人だという印象だった。私ではとてもかなわないなと頭が下がった。往年の名画「ペペルモコ」(『望郷』ジャンギャバン主演)の舞台となったアレッティホテルに泊まったことも懐かしく思い出す。その直前に働いていたインドネシアで「援助漬け」の弊害も目に付いていただけに「質実剛健」のアルジェリアには当時の私は好感を抱いたものである。

(4) エベレスト登山隊派遣後の年譜

年	月	項 目	記事	備 考	マラソン
1971	昭和 46	1	日本長期信用銀行調査部 嘱託	P1	
		8	同行に正式入社。開発エコノミスト。	P1	
1975	50	10	調査報告「アルジェリアの経済開発」を公刊	P2	
1980	55	9	勤続10年休暇でカナディアンロッキー山行	P4	2峰極め凍傷
1981	56	7	サンパウロ駐在員事務所 所長	P5	(家族と赴任)
1983	58	6	7日、ボリビア、ワイナ・ポトシ南峰登頂	P5	
		11	30日ツバロン製鉄所完成 資金調達応援	P6	(川崎製鉄)
1984	59	6			リオデジャネイロ・マラソン
		7	ニューヨーク支店筆頭副支店長	P11	
		10			ニューヨークシティマラソン
1985	60	10			シカゴアメリカズ・マラソン
		10			ニューヨークcマラソン
1986	61	5	本店営業第7部長		
1987	62	1			館山若潮マラソン
		9	資金為替部長兼資金証券システム室長		
1989	64	2	市場企画部長兼資金為替部長		
	平成 1	6	香港支店長 単身赴任		
1990	2	1			ヒマラヤトレッキング独行
		6	長銀 取締役就任		
1992	4	2	帰国 宝幸水産(株)顧問に就任	P10	
		6	長銀 取締役辞任 宝幸水産(株)取締役		
		10			蓼科白樺湖マラニック(走)
1993	5	12		大町に山荘建築	
1994	6	10			大町ラソン フル リタイア
		12		直腸癌日医大	
1995	7	1		同上退院	
1997	9	6	香港の中国返還当日、夫妻で香港へ		
		10			大町マラソンでハーフ
1998	10	1		膀胱癌切除	
		4		両肺へ癌移転	
		5		P13	(最後の有明山登)・
		6	宝幸水産社長退任、取締役相談役に就任	国立癌センター	
		9	(荻窪・ホスピス→	東京衛生病院	
		10	(6日→	死去 享年60歳	
		20	虎ノ門パストラル「お別れの会 献花者約 200 名	P9	
1999	11	4	『一期一会の山、人、本』(遺稿集)刊行		
1999		11	6日遺言によりエベレストが見えるヒマラヤの丘に埋骨	P14	

(5) 初秋のカナディアン・ロッキーズ (1980年) 中島 寛 (『一期一会の山、人、本』(遺稿集))

長銀には、勤続 10年で1か月間の研究休暇がもらえる制度があった。中島は毎日本や地図を引っ張り出し、地球儀を眺めては、あれこれ楽しい夢をえがいた。候補には、中国・天山山脈、パタゴニア、それからネパール、印度、パキスタンのトレッキング等が挙がった。次に、アルプス、カナディアン・ロッキーズ、アラスカに絞り、結局未知数の多いカナダに決定。丸善で地図、関連図書を求め、パートナーは友人の紹介で角田哲氏(33歳)という、「道標山の会」代表の電気技師。彼は人柄が良く、登攀能力に優れており、楽しい旅が出来た。10年間で10kg太り体重77kgでナマった体が気になり、一念発起。毎朝、善福寺公園周囲を4～5km走った。7、8月の海外出張先でも

毎朝走った。1カ月休暇を同僚から耳にしていた夫人は、どこか外国旅行にでも連れて行ってくれるかもしれないという淡い希望を持っていたが、次第に諦めに変わり何も言わなくなった。(休暇で主人を山に取られる夫人の気持ちや如何に?)...

1980年(昭和55年)9月、中島はパートナー角田と勇躍、ロッキー山脈に向う。

(編集室)

以下は中島の記録の要約である。

ロッキー山脈はブリティッシュ・コロンビア州とアルバータ州の州境に跨ってほぼ北緯55度から59度まで約1600kmに亘って連なる山々である。日本付近でいえば、カムチャッカ半島から千島列島の北端当りまでに相当する。最高峰は北西端のロブソン(3953m)。標高2700m以上で登山の対象となる山は、約900。標高はいずれも決して高くはないが、北に寄っており、氷河も発達しているのでバラエティに富んだ、素晴らしい登山の場。麓の標高は低く、スケール、登攀距離は大。氷河が発達し、雪線3kmくらいで低く、夏でも氷山の登山、雪崩の危険も多い。

ロッキー山脈は、中生代末の白亜紀から新生代の古第3紀にかけて起こった、いわゆるアルプス造山運動の一環として海底から隆起したものである。岩質は石灰岩で、それが風化し、氷河に浸食され、岩質がもろく、岩登りを楽しむことが出来ない。どの山も南西側が緩斜面、北東側は切りたった岸壁。天候の変化が激しい。緯度が高く寒気は厳しい。日本程、風は強くない。9月後半でも日の出が7時半頃、日の入りが20時頃で行動時間が長くとれる。どのルートも登られる回数が少なく標識、ケルンが不備。アプローチの段階から慎重かつ適確なルート・ファインディングが要求される場合が多い。登山シーズは天候の安定した7~8月だが、観光シーズンで麓は混雑。

9月後半から10月にかけて「インディアン・サマー」の好天時期で紅葉も綺麗、まさにこれだ。

9月10日 成田18時出発。シアトル→ヴァンクーバー→カルガリー。同じ日の18時30分にカルガリー着。空港近くのモーターにもぐりこむ。夜半に荷物到着してホッとする。

9月11日 130kmの距離を、値切ったタクシーでバンフへ。天気や山の情報を集め、スーパーで食糧を買い込みキャンプ場に幕営。1泊5カナダドル(約800円)。二人で、カナダのマッターホルンと言われるアッシニボインに登ることを決める。同山への初登頂は1901年に南西壁からなされている。北西壁からは難物。

9月12日 雨。パークワデンに登山届を出し、ダットサンを置いて18kmを歩き始めるも途中で雨の中、樹林帯の中にツェルトを張りビバーク。一夜を過ごす。

9月13日 小雪。前夜の雨で寝袋も着衣もぐしょ濡れでよく眠れず。近くのロッジにはヘリコプター客が朝食中。小屋番に天候の様子を聞いても不明。10cmの雪でルート・ファインディングに苦労しながらハイント小屋へ。

ビバーク地9時5分発 ― ハイント小屋15時30分着。20時就寝。

9月14日 朝、目が覚めたら7時半。小屋のドアを開けたら、まさかの青空。頂上が高く見える。今日はじっくり偵察。裏のシュトルム(3023m)に登る。ところどころ氷が出てくるが、トレーニングも兼ね、ステップを切りアイゼンを付けずに登る。長い雪稜を辿り、小さな岩場を越すと頂上はすぐだった。小屋から1時間、素晴らしい青空。アッシニボインの北壁と北西壁が目前にあり、北稜のルートも明瞭に把握できる。下の氷河から頂上までの高度差が約1000m、対岸から見ているせいか、のしかかってくるような迫力がある。中央部を帯状に走るレッド・バンドのオーバーハング帯が威嚇的だ。明日の攻略ルートが分かったが、雲が多くなりアツという間にアッシニボイン全体が黒雲に包まれてしまい

明日の天気が心配になってきた。

9月15日 2時30分起床。外は雪。しばらく様子を窺う。雪は降ったり止んだり。4時40分、星が見える。雲の切れ間にアッシニボインの頂上がのぞく。4時50分、とにかく出発。昨日から狙いを付けていた北壁の左クーロアール取り付け部でアイゼンを付け、5時15分登攀を開始。真っ暗だが雪は止んだ。雪崩の心配はない。右手にピッケル、左手にアイスハンマーを持ったダブルアックス方式が一番楽だ。アイスメスは氷が硬くてメスの刃が立たず使い物にならない。ところどころ氷が露出している部分はダブルアックス技術をフルに使い、駆け登るように乗り切るが、もし全部がこういう状態だったなら今の僕の体力はどこまで持っただろうか。7時クーロアール上部に達し、北稜上に達する。

この部分は予想より足場が不安定で緊張させられた。北稜に出たところでザイルを付け以後はスタカットで進む。最後は、北岳第4尾根の馬の背を越え、コルに降り立つ。その上が北峰の頂上、後は雪庇の張り出した気持ちのいい雪稜が主峰まで続いていた。頂上着14時50分。小屋を出て10時間もかかってしまった。1日中ほとんど何も食べなかったの、二人で分けて飲んだ1本のアップルジュースがうまかった。

(注) 中島の山行は、上記の要約よりもっと綿密な登攀記録が残されている。ここではほんの一部を掲げておく。

9月17, 18, 19日 カナディアン・ロッキー最高峰のロブソン(3954m)をトライしたが、悪天候で、本格的な雪に禍されたことと、スケールの大きさに圧倒され、高度差がヒマヤにも劣らぬ3千mもあり、甘く見過ぎて、難航。角田の助言で引き返す。

9月22日-24日テントに エディス・キャベル(3363m)東稜登攀 夜の闇迫る20時頂上。下りのルートに苦労し、岩棚でザイルにぶら下がりビバーク。寒く一晩中震え続けた。苦労してテントに着くと二人とも両足の指先が紫色。凍傷で僕は5日間、角田君は10日間、ジャスパー・シートン病院に入院。入院したら、毎日晴れてインディアン・サマー。凍傷で残りの計画を断念せざるを得なかったが、ゆっくり本を読んだり、記録を整理したり、多くの人のコミュニケーションを通じて、カナディアン・ホスピタリティをたっぷり味わうことが出来たと満足する。

(6)ブラジルの山

1982年7月、中島は、サンパウロ事務所長として、一家とブラジルに赴任する。ここでも、コスモポリタン・中島は、山登りの友達を探したり、サンパウロ山岳会(CAP・1959年創立)にも加入した。

当時、この会はポーランド隊に相乗りしてマカルー西壁遠征を企画していた。その派遣3名と会い、高度順応、人間関係等自分の経験を話し、寄付も差出して送り出した。この隊は、不幸にもポーランド隊員2名を失い、一人が登頂成功。運営は減茶苦茶で、いざこざが多く、初めてのヒマラヤで、その厳しさと残酷さを骨身に感じ「もう2度と行きたくない」と話していた。しかし、山の「マフィア」たちとの付き合いは楽しく、アメリカの仲間とリオの岩登りも楽しんだ。

水平40kmもある鍾乳洞のケービングも楽しんだ。

苦労も伴ったが、愉快的な登山は、サンパウロ、リオ、ミナス・ジェライス 3 州境にそびえるピコ・ドス・トレス・エスタードス (2655m)登頂であった。同行者は隊長格のアディ(45歳、CAP 会長のドイツ人電気エンジニア)と、ブラジル人ガルバという銀行員、それにピーター・ベリーというニュージーランド人でブラジル有数の物理研究員、皆同年配でよく気が合った。ブラジル登山重要3種の備品は、高度計、毒蛇対応の血清、ファコン(刃渡り60cmの草刈刀)雨天と道なき山、悪天候に苦労した。10月10日にサンパウロを出て11日は雨の切れ間に出発、12時15分、頂上着。12日、登高開始点に残したランドクルーザーに帰着。麓で飲んだカイピリーニャ(ピンガとレモンのカクテル)が腹にしみた。

日本人登山家とは、1983年(昭和58年)6月のワイナ・ボトシ峰登頂である。最初から目標はボリビアに絞った。出張の合間に、ペルー、チリー、アルゼンチンと種々偵察は続けていた。勤め人が短期間に少人数で6000m級の山に登ることには無理があった。それで、事前準備のため、22年ぶりにラパスを訪問した。大きなビル群が街の近代化を齎していたが、溢れるインディオたちは、相変わらず貧しく生活様式も変わっていなかった。この印象はアイマラ族の部落で一層強まった。ラパスでは街でバツタリと昔のアンデス遠征の時のボリビア人隊員、マルチネスに出会い、二人で昔を懐かしみ、高度順応やトレッキングでの準備も行った。マルチネスや馬方は「カンペシーノ」(地元の仲間)と呼んでくれた。この事前調査で登る山はワイナ・ボトシ(6094m)と決めた。サンパウロに戻って仲間探しを始めた。かねて、アンデスに登ってみたいと言っていた伊藤寿夫氏(京都大山岳部昭和38卒、日本郵船)は即OKで、あと名大山岳部OBの黒山明彦氏41歳も「参加させてもらいますわ」と共鳴し、労せずして3名からなる「ブラジル駐在員中年登山隊」ができあがった。問題は、3人の鈍った体力、高度順応であったが中島はマラソン、鉄棒に熱中した。

しかし、仕事での最も重要な問題は、ブラジルの対外債務危機の深刻化であった。IMF との交渉が暗礁に乗り上げ5月末の IMF 融資の実行が保留されたことである。本来、ラテンアメリカ諸国の経済・金融情勢の変化をウォッチし、報告することが中島の第一義的な仕事であるから、タイミングが悪い。事務所の仲間に対応を頼み、電話での連絡をはかるようにした。

以下は中島の文章。

(『一期一会の山、人、本』(遺稿集 より))

1983年6月1日 「パコッチ」と称する一連の緊急経済対策がブラジル政府から発表されるということで出発直前まで目の回る様な忙しさだった。しかし、パコッチが発表されたのは6月9日であった。ボリビアの B727オンボロ機が標高4100mのエルアルト飛行場に重たそうに着陸した。飛行場で、先発した黒山、マルチネス、渡辺氏等の出迎えを受け12時過ぎにホテルに入った。

6月2日 10時にホテルを出てチャルカタヤ・スキー場のヒュッテに到着。早速チャルカタヤの頂上まで往復の予行

訓練。

6月3日 ジープで9時半ホテル発イチュ・コータ谷へ向かう。カラ・コータ等3つの湖があり鱒釣りの名所で、当時、JICA が経済協力の一環として大量のニジマスの稚魚を放流したと聞いた。4700mでジープを乗り捨て、インディオの子供たちがポーターで3人は空手で登る。5100mの前進キャンプ着。

6月4日 快晴。しかし明け方はかなり冷え込み零下5度くらい。伊藤氏、食欲なく、若干頭痛、黒山氏もやや身体重そう、中島は昨夜はほとんど一睡もせず、それぞれ急性高山病の何らかの症状。信頼していたマルチネスがおかしい。コースをクルクル変える。伊藤氏には、用心のためマルチネスを付け帰ってもらう。引き返す途中、饅頭型のピークに登った。黒山、私(中島)、カルロスの3人で前進。脛迄つかるラッセル、氷壁をスタカットで登ったり、変化を楽しんだ。ここで一旦ジープの待つハンコ・コータ湖岸 4700mに引き返す。全員揃ったのは17時。

6月5日 愈々ワイナ・ポトシを目指すがラパスに滞在中の国立民俗博物館研究員、山本紀夫氏(京大学士山岳会)も同行し賑やかになる。15時45分、5000mの前進キャンプ着。

6月6日 絶好のアタック日和。しかし3人とも身体の調子はもうひとつ冴えない。行けるところまで行ってみよう。氷河、風、寒い。アイゼンを付け、アノラック上下を着る。やがて陽が昇り、気温上がり、身体に血が通い始め、固さがほぐれ、次第にリズムを取り戻す。先に入山したアメリカ・コロラド隊のテントが見えた。雪の膝上ぐらいのラッセル、広い雪原を、右上に向って2時間のトラバース。目の前に顕著な雪稜。尾根を左回りで目指す。頂上に到るプラトーに出たのは14時。遙か彼方に頂上が見える。主峰を狙うにはあと2-3時間かかる。ここで時間を考慮し、ビバークに入らざるを得ない、しかし疲労は限度に近い。「南峰にしよう」という中島の提案に皆賛成。主峰までが高度差400m、南峰が150m。しかし南峰も急な氷壁が続き100mの岩壁が待ち構えていた。全力を振り絞り最後の難関を突破し、頂上へ。17時やっと登頂。遙か彼方にチチカカ湖の湖面が光り、夕暮れのなかにティキマニの鋭鋒が沈もうとしていた。

下山中、懸垂下降中ロープが解け約20m転落。「一卷の終わりか」と観念したが一回転して、下の氷の棚で止まった。頭と腰を打ったが、何の怪我も無く助かった。奇跡的な幸運であった。お粗末な事故で自己嫌悪に陥る。

19時30分、5600m地点でビバーク。

6月7日 今日も快晴。何としても15時・ラパス発の飛行機にのらなければならない。7時ビバーク地を後にする。9時30分、前進キャンプ地に帰着。12時にソグー・パスに戻り、待っていたジープに飛び乗る。飛行機離陸30分前に飛行場に駆け込む。相変わらずのドタバタ劇。何とか目標を達し満足。機内では心地よくぐっすり眠った。

(7) ツバロン製鉄所と中島さん 矢部邦男 (元川崎製鉄財務部長「追悼 中島 寛 天地ある限り 2000. 10月)

私(矢部)が中島 寛さんに初めて会ったのは1982年の春頃。当時、私の勤める川崎製鉄は、ブラジルのシデルブラス、イタリアのフィンシデルと合併でブラジルのエスピリト・サント州ヴィトリア市に臨海一貫製鉄所を建設中で、川鉄外資室長であった私が、当時のブラジルの経済金融情勢を伺いに長銀・サンパウロ事務所を訪れた時でした。

ツバロン製鉄所は、ツバロン港に臨む、ブラジル最新鋭の大規模製鉄所計画として1976年9月、ガイゼル大統領の訪日に際し、日伯協力によるナショナル・プロジェクトを位置づけられ本格的にスタートしましたが、当初8億ドルの建設予算見積りが、その後のオイルショック等で30億ドルを越えそうになり、何年も難航、紆余曲折を経て漸く1980年頃から建設が本格化しました。しかし、建設は順調に進んでいたものの、1982年頃にはメキシコの信用不安、フォークランド紛争等に端を発し、中南米信用危機により、ブラジル側パートナーによる資金調達がままならず、建設凍結の危機に瀕していました。日本側の責任資金調達は、日本輸出入銀行の各種ファイナンスを始めとして市中銀行シンジケートローン、公共港への OECF(海外経済協力基金)融資等に十二分に責を果たしてはいたがこのままでは製鉄所を予定通り立ち上げるのは困難という局面にありました。こうした折、親しい金融機関等にもいろいろ相談していましたが、長銀国際部門の大野木部長(後の頭取)等にも親身に応援して頂きましたが、そこで登場してきたお名前が中島寛さんでした。長銀の方々から、中途入行だが今や長銀のエースの一人として独特の道を歩んでいる元山男とだけ伺っていましたが、初めての中島さんは逞しさの一方奥深い優しさを湛えた方で、その静かな語り口の中に秘めたる烈烈たるファイトや冷静な情勢分析に次第に引き込まれてゆきました。何より驚いたのは、ブラジル駐在まだ僅か1年足らずで既に多くの要人と親しく付き合える関係を築いておられ、従って情報も生き生きしていることなどでした。実は私も1977年から4年間、川鉄・リオドセ(鉄鉱石)合併現法で取締役として働いた実績があり、ブラジルのビジネスに関しては、こちらが先輩という不遜な気持ちも少しあったのですが、そ

の気持ちが畏敬の念に変わるのにさしたる時間は要しませんでした。後に、日本輸銀の佐藤久尚課長(当時)から、中島さんが一橋大山岳部 OB の中でも傑出した存在でエベレスト遠征の猛者だった事を伺い、改めてさすがと感服したものです。当時川鉄ツバロンプロジェクトのリーダーであった加藤眞三郎部長(当時、鉄鋼原料畑のエース)と親しく交流され、リオデジャネイロでも会い貴重な情報やご意見を頂いていました。何処へ出張される時もジョギングシューズを持参、「リオのコパカパーナ海岸の早朝ジョギングが最高」と嬉しそうでした。そんな中島さんのアドバイスがきっかけとなり、遅滞した製鉄所建設の最後の一押しとなったセール・アンド・セールバック方式による設備資金調達を検討され、種々の困難を乗り越えて実行に移されたのは、それから数か月後の1983年4月でした。同年11月30日、ツバロン製鉄所はフィグレード大統領臨席の下、高炉に火入れし華やかな操業スタートを切ったのです。その陰に、中島さんのご尽力があったことは決して忘れられません。

(8) 背負ってもらった人生

平尾光司 (一橋大36年社卒、元日本長期信用銀行副頭取、
長銀総合研究所社長、学校法人昭和女子大学理事長を歴任)

「追悼 中島 寛 天地ある限り 2000. 10月」より

1998年(平成10年) 5月6日の夕方、中島から「至急会いたい」との電話があった。いつものゆったりとした口調ではあったが何か緊迫感を感じさせるものがあった。

訪れた彼から聴かされたのは「転移性の肺がんの告知を受けた。病状がかなり進行している」と、全く予想もしなかった信じられない内容の報告であった。そんなことあるはずがないと叫びたい僕を前にして、彼は淡々と3年前からの病歴と医者の方の病状診断を説明し、今後のことを覚悟して連休に北アルプスの有明岳に登ってきたことなどを語った。

そして彼は宝幸水産の社長としての任務をどう全うするか、今後の治療と社業の兼ね合いをどうつけるかなど、自分の考えを整然とまとめて、僕にアドバイスを求めた。それは中島らしく、いかに自分の責任を完遂するかという目標を軸に組み立てられて考え抜かれたものだった。僕は誤診であることを祈り「最高の診断と治療を受けることが責任を全うすることではないか」とアドバイスするのが精一杯であった。しかし、中島は樫の大樹が倒れるようにとうとう逝ってしまった。思えば僕たちの40年以上の友達付き合いのきっかけは、大学入学式の日に学籍登録の列の前に並んでいて、ロマン・ロランの話になったことだった。その後、自治会、ゼミナールなどを通じて、彼のスケールの大きい人間的魅力に惹かれて僕は敬愛の念を深めていった。彼は山岳部の活動を発展させ、卒業する頃には既に日本山岳会の代表的なアルピニストとして活躍していた。卒業とともに一橋大学アンデス遠征隊に参加した時の報告書は、今も僕の書架にある。日立金属に入社した後もその活動は止むことなく、昭和44年、45年と日本山岳会のエベレスト登頂隊に参加した。そのために会社を辞めることになり、帰国後、当時は珍しいことだったが、長銀に途中入社することになった。僕はお陰で仕事上もかけがえのない畏友を得ることになったが、その後の彼の銀行での活躍は改めて紹介するまでもない。

3年前の夏、大学同期生の西牧君の訃報を受けた時僕は足の怪我で会社を休んでいた。斎場の千日谷会堂の高い階段を思うとギブスで固められた足ではとても参列できないと思いながら最後の別れはしたい気持ちも強く思案していた。そこに中島から電話があり、「足の怪我と聞いたけど俺がおぶってやるから会場まで何とかしてこいよ」といつもの力強い声で誘ってくれた。当日は、戻り梅雨の激しい雨となったが、中島は入り口で待っていて軽がると僕を背中に担いでくれた。彼のたくましい背中にゆったりと背負って貰いながら、彼の一段一段と力強く階段を登っていく足取りが続く。彼が世を去ってから折に触れて、学生時代から40年の歳月の無数の追憶が迫ってくるが、それらの思い出はすべてあの日の彼の背中の温かみに感じた安らぎに収斂していき、その温かみと安らぎを永遠に喪失してしまった悲しみに心が重く沈む。西牧君の告別式で中島の背中に負われたのはそのように彼にサポートされてきた僕の人生の象徴であったように感じられる。

中島が逝ってからマーラーの交響曲第1番「巨人」をよく聞くようになった。第一楽章「春と永遠」から第5楽章「地獄から天国」までのそれぞれの楽章の曲想ごとに彼の面影と思い出が甦ってくる。そして終楽章の高揚感が突然打楽器の爆発するような連打で終止符が打たれてしまう。まるで予告なしで孤独な宇宙空間の深い闇に投げ出されたような終わり方である。それは彼との全く思いがけない永訣と重なる。僕はこの孤独感、喪失感から未だに立ち直ることができない。マーラーの1番を聞く時には必ず第2番「復活」をセットして聴くようになった。

「丁度よい」の作者を尋ねて

丁度よい 藤場 美津路

お前はお前で丁度よい。 頭も体も名前も姓もお前にそれは丁度よい。
貧も富も親も子も息子の嫁も その孫もそれはお前に丁度よい。
幸も不幸も喜びも悲しみさえも丁度よい。歩いたお前の人生は悪くもなければ良くもない。
お前にとって丁度よい。地獄に行こうと極楽に行こうと 行ったところが丁度よい。
自惚れる要もなく卑下する要もない。上もなければ下もない。死の日、月さえも丁度よい。

中島のお別れ会での昭子夫人のご挨拶は深い思いと参列者への心配りの行き届いた感動的なものであった。その中でこの詩を中島を最後まで支えた心の糧であったと朗読され、参列者の感銘を一層深いものにした。

その後、参列した幾人かの方々から作者を教えてほしいと私のところに問い合わせがあった。朝日新聞の安部編集委員が同紙上でお別れ会の模様を報じ、その中でこの詩を紹介されたということもあった。

明子夫人にお聴きしたところ中島が行きつけていた銀座のびいどろ亭の小沢けいさんが彼の入院見舞いに持参されたとのことであった。早速に電話をしたが、小沢さんは数年前に店のお客さんからコピーを貰ったものでその方は出張先で手に入れたらしいということしかわからない。残された時間を見つめながら自己の尊厳を最後まで失わなかった中島を支えたこの詩の意味の大きさを感じていた。また 5 月の連休を甲斐大泉で「一期一会」を読んで過ごした。南アルプス八ヶ岳のパノラマを眺望しながら中島を偲んでハイキングをしていた時も「丁度よい」が心に去来した。連休明けで東京に戻ると銀行の同僚の U 君の自死のニュースがあったし、この不条理に耐え精神の平静を保つためにこの詩が大きな支えとなった。すがるような気持ちで心の中で唱えていた。

「一期一会」を読まれた方々からも、「丁度よい」の原詩の作者についての問い合わせが寄せられた。何の手がかりもなくあぐねていると、お盆に昭子夫人から良寛上人の歌であることが判ったと連絡を頂いた。新潟の岩室温泉近くに良寛さんの座住したお寺があり、そこにその原詩があるらしい。

11 月に「一期一会」の刊行記念とエベレストでの墓銘建立の報告会を兼ねた集まりがあり、その席で中島の浦和高校同級生の城山氏から、そのお寺は岩室温泉の旅館綿屋・綿々亭に問い合わせれば分かった、その住所、電話番号等を教えていただいた。11 月下旬に新潟に出張する機会があり、綿々亭に電話した。先方の対応が少し不要領で気にかかったが、お待ちするということであった。直江津から新潟に向かう途中で良寛記念館に立ち寄り展示されている良寛の歌書を丹念に見たがそれらしき歌は見当たらず綿々亭に向かった。それは弥彦山の麓にあり江戸時代に綿花の取引で財を成した豪商の邸宅を温泉旅館に改造したもので往時の繁栄ぶりを偲ばせる佇まいである。

対応に出て来られた番頭さんは、電話を頂いて調べたところその詩は従業員がどこかの旅先で頂いてきたもので素晴らしいのでコピーを宿泊のお客様方に差し上げていたようですとのことであった。がっかりして僕はその従業員の方に連絡が取れませんかと聞くと、しばらく前に転職して音信不通で住所も分かりません、という答えであった。これでは全く手がかりがないと気落ちしてしまった。僕を気の毒がってくれた番頭さんは、その従業員が貰ってきた原紙が残っていますのでせめて記念にお持ち下さいと言ってコピーを取ってくれた。

それを見ると詩の下に「一揆そば」と文字がある。もしかしたら「一揆そば」という蕎麦屋さんからこの用紙を頂いてきたのではないかと思い、番頭さんにこの屋号の蕎麦屋さんを知らないかと聞くと聴いたことがないと首をかしげられた。

そのまま綿々亭を辞して新潟市に入りその夜、新潟の大きな本屋に行き良寛コーナーで幾つかの良寛歌集を参照したが、「丁度よい」は何処にも収録されていなかった。その頃から、僕の心にこの詩の作者は良寛ではないかもしれないという疑念が生じてきた。唯一の手がかりとなった「一揆そば」を探す以外にはないと思い、どうしたら探せるかと思案していた。年が明けて 1 月 13 日に綿々亭にご案内いただいた帝国石油新潟工業の円谷取締役社長からお電話があり、「丁度よい」の作者が判明しました、と思いがけないご報告を頂いた。

円谷さんは「一揆そば」をキーワードにしてインターネットで検索され、まず石川県野々市町の蕎麦屋さんであることを突き止められ、そちらにお電話され作者は同町の常讃寺坊宅(浄土真宗のお寺の奥さんの称号)藤場美津路様である事を調べて下さった。早速、教えられた電話番号で常讃寺にお電話したところ、ご本人はお留守でご子息が出られた。「丁度よい」は藤場様が昭和 57 年に檀家の方々との仏教の勉強会でお話をされ、ガリ版印刷で発行していた寺報(お寺の機関誌)に発表されたものであること、それが色々なルートを辿って各地に広まっていつ

たこと等を伺った。僕は早速に藤場さんにお手紙を書き「丁度よい」の作者を尋ねていた理由と経緯をしたためた。また中島の「一期一会」やエベレストの写真を送りした。

御返事がすぐにあり、詩を発表された当時のガリ版のコピーや、紹介された名古屋同朋大学学長の池田勇先生の湯溪社録と共に、北國新聞から出版された自伝『湖底の大地—手取の流れとともに』をご恵送いただいた。

この自伝で白山のふもと、手取川の源流の地で生まれ、常讃寺にお嫁入りされて、小学校の教職に就かれたことなどを知った。これで「丁度よい」を尋ね求めた旅が終った。

藤場 美津路夫人のお手紙 平尾光司さま (石川県・常讃寺坊守)

中島様の尊書有難うございました。「一期一会の山、人、本」を二日間で読破することができました。有難うございました。中島昭子様にもどうか宜しくお伝え下さい。著書の初めに〈丁度よい〉の文を目にし、何だか自分の腹を痛めた子供に出会ったようないとしさを覚えました。

この散文を書きましてからもう17, 8年経ちます。あの頃、人生に行き詰まりまして悩んでおりました。その時親鸞の教えに出遭うことができて、新しい目覚めの人生を頂いた時のことで1982年でした。……

(藤場美津路夫人は平尾氏の言によれば、現在、95歳で、今尚ご健在とのことである。編集室)

(9) さまざまの追想、惜別

中島 寛氏の追悼の記録には、新三木会事務局に、寄贈いただいた以下の3冊がある。

- (1) 一期一会の山・人・本 1999. 4. 23 著者 中島 寛 発行者 中島昭子
- (2) 追悼 中島 寛 天地ある限り 2000. 10月発行 発行者 中島寛追悼集刊行委員会(寄稿73名)
- (3) 針葉樹会報 第88号 中島 寛氏 追悼集 1999. 4 中村 保 編集 (寄稿54名)

上記(2)(3)で重複はあるが127名の方々の思い出や弔文があり、それぞれ拝読させて頂くうちに、編集子は惜しくもご本人に拝眉できなかったが、中島 寛氏の尋常でない、スケールの大きい人物像が浮かび上がってきた。新三木会々報に、7-1, 2, 3そして 8-1号、都合4回、紹介させて頂いたが、交友録の多数の方の多彩な興味深い記録を掲載させて頂くには誌面の限界もある。ここに、数名の方の抄録を追記させて頂く。

・お別れ会の日本山岳会代表弔辞。 (「針葉樹会報 第88号 中島 寛氏 追悼集」1999. 4 より)

宮下秀樹氏 昭和28年慶應義塾大学経済学部、30年法学部卒。慶大山岳部OB会「登高会」元幹事長。神静商会代表取締役1969年秋日本山岳会エベレスト南西壁偵察隊に隊長として参加。その後80年には日本山岳会チョモランマ登山隊に参加、北壁隊の隊長を務める。故人の中島とは69年にエベレスト登山隊に参加して以来、山仲間としての親交が深かった。以下の弔辞は1998年10月20日 お別れ会 (於 虎ノ門「パストラル」)のもの。

中島さん、いや、今日も寛ちゃんと呼ばせてもらいます。

寛ちゃんと初めてお会いしたのが69年の日本山岳会のエベレスト遠征準備の時でしたね。

一橋の吉沢一郎、望月達夫、両先輩の秘蔵っ子と聞いてはいましたが僕らの仲間には滅多にいない学究派のタイプで新婚早々なのに会社を辞め、エベレスト一筋に打ち込んでいて怖いぐらいの迫力がありました。

南西壁の試登は世界で誰も手を触れていない岩壁に登れる喜びに皆、感激していましたが、ネパールでは5年間登山禁止の直後だったため、荒れたアイスホールを乏しい装備食料をやりくりして突破しよく登りましたね。

幸い隊員に小西政継、植村直己、井上治郎君など個性的で優秀なクライマーがいたからでしょう。結局、君と佐藤之敏君のペアが南西壁の8000mを超えたところでこの登山は終わりましたが、この第2次偵察隊が私にとっても最も気分の良かった隊として強い印象があります。5300mのベースキャンプでの酒盛りで毎晩ボトル一本ずつ開くペースだったけれど君の酒豪ぶりには目をむきました。

果たせなかった南西壁を完登したいと74年に登山許可の申請にネパールのカトマンズに行きついで貰いましたね。まだお互い若かったのでは何とかやれると思っていたんですが、ネパール政府から78年度の登山許可の内諾は得られたのに、残念ながら75年に英国ボニントン隊の再度の挑戦に先を越され、そこで吹っ切れたのか君のビッグクライムは終わり、また猛烈仕事人間に戻ったんですね。それにしてももし登山を実行した時には、君は

また銀行を辞め奥様をビックリさせて行くつもりだったんでしょうか。

私は懲りずにチベットに転身し、80年に世界で初めてチョモランマの北壁からの登頂に成功しましたが、寛ちゃんがすごく喜んでくれたのを覚えています。お仕事の合間に日本山岳会の年会誌「山岳」の編集や会の財務担当理事をやられ大変だったと思います。長い外国生活が終わってからの超多忙ぶりは変わらなかったけれど、日本山岳会の創立100周年に発刊予定の百年史の委員会の委員長を引き受けられ、近々その構想がまとまると聞いておりましたが、日本山岳会にとっても全く貴重な人材を失い残念でなりません。来春、君の遺言で大好きなエベレストの山麓に散骨されると聞きました。できればお供いたしますがその時にはマッキンリーから帰ってこなかった植村君、マナスルの下山途中遭難の小西君、梅里雪山で眠っている井上君達とまた霊界で再会し、お酒を酌み交わすことになるのでしょうか。もう息切れもしないから何処へでも登れるのですから。さようなら。

後に、新三木会ご参加頂く方々が、平尾氏、矢部氏も含め、追悼集に登場されている。以下、誌面の都合で、失礼ながら省略させて頂いたが、紹介させて頂く。（「追悼 中島 寛 天地ある限り」2000.10月発行より）

・沼邊義秋(長銀→宝幸水産(株)後継社長。お別れ会・弔辞の一部)

私があなたに最後にお目にかかったのは、御逝去の僅か数時間前でした。お休みの御顔に「また近い内にお伺いします」と挨拶、帰宅して自宅で就寝前に奥様から「つい今しがた主人が他界しました」との電話がありました。5月の某日、あなたは「経営改善計画の推進は、新経営体制で臨むべきである」と披露され、不肖私に社長就任を望まれました。私は「今こそあなたの先見性と行動力、指導力が必要な時です」と固辞しましたが、あなたは「全面的に支援するから」と強く主張されました。入院後も電話で、また、数度に亘り来社の上いつも適切なアドバイスをされ、まさに昇天の間際まで取締役相談役の職責を全うされました。まさに、あなたは「素晴らしい人間力を備えた人でした。」

・白石武夫(故人・35年卒、元如水会業務部長)

中島について何か語ろうとするとあまりにも多すぎて迷う。私は昭和32年、行きがかり上、大学前期(小平2年生)自治会の執行委員長を引き受けることになった。当時の全学連執行部は代々木よりさらに左のグループが指導権を握り、そのイデオロギーで各自治会を指導しようとしていた。わが自治会の中にもこれに同調する者がおり穏健派と鋭く意見が対立。一方無関心派も多く私は運営に悩んでいた。当時1年後輩の、中島、加藤、平尾たちが私を励まし支えてくれた。私の愚痴に中島は多摩湖線を延々と歩き語り合ってくれた。中島が年に百日近く山で過ごしていることを知ったのは、私が社会人になってからだ。自治会で山の話をしたことは一度もなかったし、いわんや自治会を休んだこともなく、責任感がものすごく強く、また自分の特技を自慢するようなところはこれっぽちもなかった。

・藤田欣也(36卒、クラスメイト、元古河電工ブラジル会長)

Gクラス(前期)でともに学び、ともに遊んだ仲ですが、「何と包容力のある奴だ。まるで兄貴のようだ」と感じていました。何をやっても後ろで静かに見守ってくれている存在でした。私が2度目のブラジル勤務を終えて帰国した時、お互いの勤務先が築地の隣組だったこともあり、声をかけて貰ったのでした。懐かしいブラジルの話、水産会社の大リストラの話、銀行も大変なこと、等々話は尽きませんでした。ブラジルで、中島君は、駐在当時、リオの岩登りとか、3州に跨るピコ・ドス・トレース・エスタードス登山とか、あの本(一期一会の山・人・本)の中で書いていましたが、本当は長銀の貸し込んだ債権を徹底的に売却し、銀行の不良資産を減らそうと身を削っていたのです。そんな事実を、付け加えて、彼の思い出を締めくくりたいと思います。

・森岡義久(39卒、大学、長銀でサッカー部、元長銀取締役)

長銀でも花小金井の青い芝生と仲間の魅力でサッカー部に在籍した。中島さんは遅く入社され「サッカーを始めた時が33歳、技術的にも素人なのに、若い部員たちの面倒をよく見て貰ったことを感謝している。しかし、週末、山や、スキーに行かない限りグラウンドに出かけた。普通の人が現役を引退する年になってボールをけり始める中島さん。山から帰ったその足で、平然と午後の試合に臨んでいた。長銀サッカー部も大学サッカー部出身の「ホンチャン」組が相次いで入部し、昭和51年春念願の一

部復帰を果たすのだが、デフェンスの要として抜群の体力で体を張り、その取り組み姿勢が部の雰囲気を変え昇格の原動力になっていきました。直向きで、全力投球のお人柄そのものでした。春は沈丁花の甘い香り、夏の夕暮れは椋鳥の群れ、秋はモクセイの原木が金の粉を振りまく「あの花小金井の芝生」、それも人手に渡っていきました。今、中島さんを失い一つの時代が確実に過ぎて行きました。

・佐藤孝靖(京大法41卒、元長銀常務取締役)

私が鉄鋼担当の営業部の頃、ブラジル国の外貨繰りの危機に際し、サンパウロ事務所長の彼が、現地から日本リースと共同戦線を張り、奇想天外なファイナンス提案をぶちあげてツバロン計画に砂漠のオアシス造りをやり、私は感動しました。さらにニューヨーク支店勤務時、中島宅にで家族で押しかけ昭子夫人にもご馳走になり、酔い潰れて泊めて貰いました。赴任3か月後、中島、村田、私の3家族でロングアイランドへ一泊、釣り旅行ドライブにでかけた時、ハイウェイ渋滞で私は前の2台を見失い、おまけにエンジントラブルを起こし、大騒動。最後は警官出動で何とか出口に到着した。既に暗く、土砂降り。その雨の中、中島、村田さんが駆け寄ってきました。「よかった、よかった。よく辿り着いた、大変だったろう。温かい飲み物があるよ」と遅れた訳など聴きません。温かい、大きなもので包まれたような安心感、それが、中島さんの大きさでした。

(10) 凄い男(ひと) 菊地秀行 (作家・義弟「追悼 中島 寛 天地ある限」 2000. 10月より。)

義兄(家内の兄)の葬儀に参列してくれた人々の数に度肝を抜かれた。義理だけで 1000 人単位の人間が集まるわけがない。そういう人物だったのである。私は自分の親戚どころか、正月にも親の顔さえ見に行かない無精ものだから、義兄との交流も無いに等しかった。亡くなるまで膝を突き合わせて話をしたことは一度もない。それでも凄い男だと思う。そう確信するしかない状況で、私は義兄に会った。亡くなる数ヶ月前・・・すでに腸癌が肺に転移し、酸素ボンベを使っていると聞いていた頃、私は家内と義兄を訪れた。当人ははっきり、死を免れない運命と知っている。どう対応し、どんな顔をしたらいいものか。・・・誰だって悩む場面である。ましてや酸素ボンベだ。ベッドに横になってそれを吸引している男に何を話せばいい。

だが居間で待つ私たちの前に、義兄はガウンでやって来た。少しやつれは見えたと、身体つきも変わっておらず苦しそうな風に見えなかった。これが、ほとんど余命幾ばくもない男の姿なのだろうかと思った。しかも、当人もそれを知っている。はっきり書くが、私なら不治の宣告を受けた時点で、絶望し、どこまでもふさぎ込んで暮らす。

死の前には、家人や友人の慰めなど何の役にも立たない。彼らは生きられる。代りに死んではくれない。もしも彼らのうちの誰かが死ぬことで私が助かるというオカルティックで残酷な救いがあるならば、私はためらいなく救われる道を選ぶだろう。死とはそれほど恐ろしいものだ。

義兄はどう見ても、死を恐れていなかった。ポーズではない。それはわかる。話しぶりも、態度も、いつもの義兄のように堂々としている。何の話をしたのか忘れたが、彼はひとこと「ジタバタしたって仕様がねえ」と言った。その通りだ。だがその通りの生き方はできないのが普通なのだ。この男(ひと)は死ぬのが怖くないのだろうかと思った。小説や映画ならいくらでも勇者は存在する。それを真似ようとしたってできるものではない。ここで 凄い男と感心すれば話は終わりだが、その前に、私は死ぬときはこうありたいと思う。思ってもできるものではないが、とにかく、そう思わせる力が義兄にはあったのである。動く義兄を見たのは、それが最後だった。死に際がよければいいというものでもない。義兄のような死に方は誰でもできるものではない。今でも、癌だったら教えるな、と家内に言明しつつ、義兄のように死に際を飾りたいと思っている。

(11) 60 年安保を経て卒業の頃 一吾等が若き日々 (追悼 中島 寛 天地ある限り 2000. 10月より。)

加藤 幹雄 (一橋大経済学部 種瀬ゼミ 36年卒、元住友金属工業(株)副社長)

大学 3 年の時、中島は後期自治会の委員長だった。安保闘争の始まった年(1959 年)である。国立のキャンパスで活動する上で一番困ったのは学生が少ないことだった。朝ビラを配るにも 100 枚もあれば十分だった。在籍の学生は1000人は居るのに、なんと学校に來ている学生の少ないことか。月曜日の朝 9 時から中山伊知郎先生の経済原論の講義があった。看板授業だから比較的沢山の学生が出席していた。中島に演説をしてもらうために、人もあろうに中山教授に安保のことで学生に訴えたいので、授業時間の一部を自治会に割いてほしいとお願いしたこともある。

それでも時間が経つにつれ 後期(国立)でも随分盛り上がった。中島とはずっと行動を共にした。私はいつもせっかちで結論を急ぎたがった。左翼小児病という言葉(レーニン)があるがこれがぴったりだったかもしれない。中島は私と違って熟慮型だった。いつも議論になると中島は延々と語った。私と違って、牛の反芻のように話してるうちにだんだん結論を探っていくような所があった。始めと終わりですっかり話が変わっていることもあった。ただ彼の話を聞いている間に「ああ、そんな見方もあったよね」と気分が落ち着いてくるのが不思議だった。

中島は子供の頃追い回した昆虫のような複眼でものを見ることを心がけていたのかもしれない。ただ一旦決めると彼の行動は果敢だった。その後の安保闘争の盛り上がりの契機になったと言われる 4.26 闘争(1960)というのがあった。

国会前に学生が集まった。リーダーの呼びかけで学生たちは機動隊が装甲車で固めるバリケードを越えた。一橋のグループも「これを超えないと未来はない」という気持ちで中島が先陣を切り全員がバリケードを越えた。

我々は国立で集会を行い、小平(前期)と合流して国会方面に電車やバスで向かうのが行動のパターンだったから、一橋のグループは現場にたどり着くのが遅れがちになった。

樺美智子さんの亡くなった6.15 闘争の時も、我々が国会に辿り着いて間もなく訃報を聞いた。夕刻になって学生は国会の中に入った。その際、我々のグループで、中に入るべきかどうかで議論が巻き起こった。確かデモに出る前に自治会では国会には入らないという取り決めをしていた。中島と私は取り決めにかかわらず、我々も国会に入って樺さんの死に抗議して他の学友と共に戦うべきだと主張した。議論は堂々巡りとなったが、そうこうする間に学生は機動隊によって国会の外へ追い出されてしまった。

安保闘争は 1960 年 6 月 18 日の国会デモと午前零時の改定安保条約の自然成立で終わった。6 月 23 日に 樺さんの追悼会が日比谷公会堂であった。それから安保闘争の総括の会合がいろいろの局面であった。最初は、安保闘争は岸内閣を打倒したのだから部分的勝利だとの評価が有力だったが、やがて全面敗北だという意見が主流となり、全学連主流派は四分五裂の状態となった。私は関わりになるのが億劫になり虚脱感と疲れが残った。

中島は安保闘争が終わるのを待ちかねたように山登りに戻っていった。中島が書き残した一期一会の記録を見ると、7 月から 8 月にかけて 19 日間も夏山合宿に入っている。疲れをものともしない気力と体力には驚くほかはない。もう 4 年生の夏も過ぎようとしているのだから、山から戻った中島と将来の進路の相談をした。当時は一橋大学の卒業生で大学院に進学する学生が少ないことが問題になっていた。

二人でゼミの種瀬茂先生のお宅に伺って、大学院に進学できないかとお願いした。温厚な先生は、この時ばかりは「君たちは社会に出て働く人だ。大学院には行くべきではない」と一蹴された。親切にもゼミの先輩の日立金属の長嶋さんを紹介していただいた。中島は結局、日立金属のお世話になることになった。

同じころ中島は山岳部の顧問をされていた 関恒吉先生を訪ねている。関先生はトロッキストがいかにも犯罪的な集団かを述べられた後、「お前に学問ができるか、早く社会に出て働け」というお話だったと中島に聞いた。

先生達から見ればろくに勉強もしないで運動に明け暮れていて、今更学問もないだろうということだったのだと思う。ただ最後に「どうしても行く処がなければ相談に乗る」と言われた時には本当に嬉しかった。私も結局就職を選んだ。学生運動に携わっていて就職できたのは僥倖というほかないが、中島も私も安保の敗北を通して変革を目指すにも、まず世の中の仕組みがどうなっているのかを自分で見極めないことには、もう一歩も進めないという思いだった。40年前の60年安保が今どう評価されるのかはよくわからない。卒業後 25 年くらい経っていた頃だろうか、日経新聞の「私の履歴書」で福田赳夫が当時を回想して、岸内閣の退陣は深刻な危機を招き、社会党右派の西尾末廣に組閣の打診に行ったほどだったと書いてのを知って、一概に「敗北」とばかりは言えないなど中島と語り合ったのを覚えている。岸首相が安保をより双務的な形に改定した上で、憲法を改正して、自前の軍備を強化するという「普通の国家」を目指していたことは明らかである。岸内閣を継いだ池田内閣以降、歴代の内閣が辿ったのは軽武装の「経済国家」の道だった。卒業の時に宮崎省吾の提唱でサロン・ド・アンボン(一橋サロン)という組織ができた。宮崎の書いた文章を読み返してみるとこの組織に込めた彼の卓抜なアイデアがよく分かる。学生時代に日本の大転換の時期を経験した我々は道交法違反の常習犯として自らを 創ってきた。現在の日本では最も正しい

自己形成の仕方であった。卒業に際し、自立した個人を前提にして、「いかなる環境をも一人で克服しようとする人間の裏の組織」を必要としている。何かを決めたり創造するものではなくそれぞれが大学で培った方法を発展させる契機となる性格のものである。これはサークルではなくサロンと呼ぶのがふさわしい。政治的にして社交的なしかも創造的なサロンがイメージできる。親父の下半身を作ったやつの顔はどんなだろうと子供達が(勿論奥さんも)目を輝かせて出てくる情景は想像しただけでも楽しいではないか。

サロンの活動が活発だったのは卒業後間もなくだけだったが、ずっとサロンの仲間は我々の精神的な支えでありサロンは交友の核となってきたと思う。中島はサロンの中心メンバーだった。サロンの機関誌(The United)の創刊号にはサロンの名簿があり、29名が名を連ねている。中島を含めてすでにこのうち6名が亡くなっている。この機関誌の命名も宮崎で、当時ベストセラーで映画にもなったイギリス人の女性とライオンの交流を描いた「野生のエルザ」の原題である。野生のような、飼いならされていない統御できないものたちという意味が込められている。

気の多い中島のことだからやり残したことや取り組みたかったことは随分あったに違いない。

私の左半身はもうすっかり老化し、飼い慣らされてしまったが、せめて一つぐらいはできればサロンの仲間と手掛けてみたいと思う。テーマについてのアイディアはいくつもがあるが、生前、中島と話した話題から思い起こすと、さしあたり憲法。サロンのメンバーであった故飯沼健真の力作「読売版・憲法改正草案」にも再度注目する必要があるだろう。

令和3年8月某日。愚問ながら、電話で、「今、中島 寛さんを振り返っての感慨はいかがですか」と聴いた。
『これ以上の友達はいない。……(絶句)』(編集室)

(12) 最後の山 有明山

中島 寛(遺稿) (「一期一会の山・人・本」1999. 4. 23 刊)

登りたいと思いながら 何となく行きそびれている山が 幾つかある。
有明 山がその一つだった。安曇節にある「何を思案の有明山に 小首傾げて出たわらび」のあの有明山である。有明山は標高 2269mの立派な山容の山である。「安曇富士」とも呼ばれている。しかも地元でヤマといえばこの有明山か鍋冠山を指すくらい人々に親しまれているのに、その背後に安曇野のシンボル常念岳が大きく聳えているために、どうしてもかすんでしまう。割を食った、可哀相な山である。ガイドブックを見ても登山コースが記されていないくらい登る山としても見捨てられている。あの山田さんさえどうやら登っていないらしく、山田さんの山行譜を見ると、南北アルプス 拾遺 8 コースの中に有明山が入っている。

このゴールデンウィークは、日の巡り合わせがよく、1 日休日を取れば一週間の連休になったのだが、仕事の都合や体調を考えて、大町の山荘を基地として、一人でせいぜい2, 3日の山行に出掛けようと考えていた。ところが4 月 30 日、休日を利用してかかりつけの日本医大第二病院に出かけ、志願して胸部の CT 撮影をしてもらったところ、直腸から肺への癌の転移が発見されてしまった。両肺の肺野部に大きく影が広がっているため、手術は不可能で、化学療法しか手がないとのことだった。



はっきりと言わないが、深刻な段階まで進行しているようだった。日常生活では、ほとんど何の徴候もなく、就寝時に咳が出るのが気になる程度だった。しかしジョギングをすると、何となく息があがり、酸素が身体の隅々まで行き渡らない感じがあって、一度ちゃんとした検査を受けておかねば、と思っていた。それがこんなことになっているとは想像もしなかった。大きなショックだった。来るべきものがとうとう来たという感じた。2 日前の会議で来季続投の意思を表明したばかりだったが、この 6 月で会社の社長職は辞任しようと思った。その上で、やり残したことはどうするか、病気の治療はどうするか、家族のことはと考えるが、混乱するばかりだ。持ち時間は限られている。しかし、どうせ連休中は何もできないのだし、大町の山荘でゆっくりと考えてみよう、当初の予定通り、翌5月1日、女房の運転する車で大町に向かった。途中は、たっぷり時間があるので女房の年来の念願をかなえ、中津川の滝さんのお宅を訪ね、馬籠の宿、妻籠の宿といった木曽路の観光名所をゆっくり廻った。5月2日。薄曇りのち小雨。朝、目が覚めて見ると、割合に天気が良い。しかし今日1日もてばいいところだ。思い切って山に行こうと決心する。自然に意欲が湧いてきた感じだ。頭の中には雨飾山、針ノ木峠から蓮華岳、有明山の三つの候補があったのだが、すぐに有明山に決めた。こんな時じゃなきゃ登れないという気がした。この機を逃

せば、もう登ることはできないという予感のようなものもあった。朝食は 8 時 20 分、女房の運転で山荘を後にする。中房温泉側から取りつくつもりだったが、中房川に沿った槍ヶ岳矢村線が工事のため全面通行止めになっており、やむなく馬羅尾澤沿いの松川口に方向転換する。キャンプ場を過ぎ、車で入れるギリギリの所まで入り、9 時 50 分、登り始める。女房には「午後 3 時半に迎えに来てほしい。1 時間くらい遅れるかもしれないが、心配しないように」と伝える。最初の 30 分程は沢沿いの快適な林の道が気持ちいを和らげてくれる。それからは沢の中の岩伝いに進む。第一、第2徒渡渉地点、大曲を経て、いよいよ尾根に取りついた時は、すでに 12 時を過ぎていた。天候も悪化し、あたり一面ガスで 100m 先が見えず、小雨が降り始める。この時点で、3 時半には戻れそうもないことを覚悟する。それでは、このまま下山するか？ やはり行けるところまで行こう。沢を離れて尾根にかかると急登が続く。出発点で地元の釣り人が「去年の連休の時は頂上直下に雪渓が大分残っていたが、今年はあまりないんじゃないか。しかし長いですよ。登りに 4 時間は覚悟しておいた方が無難でしょう」とアドバイスしてくれた。登るに従って、実感が出てくる。もう尾根の肩ではないか、そろそろ頂上ではないか、社や祠を見る度にそう思うが何回も騙され、騙され、どんどん森の深みに入り込んでいくような錯覚に襲われる。それほど道は荒れていないが、人があまり通っていないせいか、倒木や小さな崖崩れが道を遮り、所々に雪があって登りにくい。ますますこんなところから撤退する気にならない。結局、頂上に着いて、大きな鳥居の下をくぐったのは 2 時 20 分になってしまった。あたり一面霧が立ち込め、残念ながら安曇野を一望することは叶わなかった。寒くて何も食べる気も起こらなかったが、一杯のリンゴジュースがうまかった。

久しぶりに頂上で味わう充足感だった。下りは登り以上に大変だった。女房を持たせているため気がせくが、岩は湿っているし、急なため、一步一步慎重に下る。車の待っている場所に帰り着いたのは午後 5 時 40 分。夕闇が迫っており、女房にはすっかり心配をかけてしまったが、とにかく無事下山できた。登り4時間半、下り 3 時間 20 分、合計7時間 50 分の結構大変なアルバイトだった。しかしゴールデンウィークの最盛期にも拘わらず山の中で誰にも会うことがなかった。静かでいい山だった。気持ちが洗われ、蘇生した気分だ。

たった 1 日の登山でもこれだけの労働をすれば肉体的に大きな負担がかかることは確かだ。

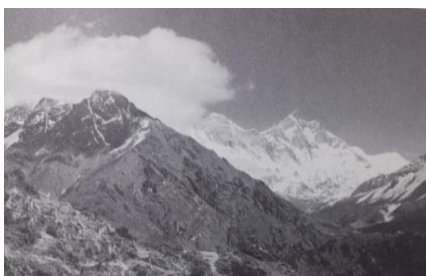
病んだ肺には尚更だろう。結果として病状を悪化させたかもしれない。しかし咳や痰もあまり出ず、負荷を加えて自分の身体の現状をつぶさに点検するいい機会になった。

人からはよく「いい年をしてなんて無茶をやるんだ」と批判されてきたが何歳になっても人間の性は変わらないのかも知れない。しかし長く苦しいであろうこれからの闘病の中で、今日有明山に登った記憶が気持ちの支えになってくれる効果の方がはるかに大きいはずだ。

食道癌で亡くなった江國滋氏の病中の俳句集を読んでいて印象に残った次の句がふと浮かんできた。

癌告知受け 闘志充つ春の虹

おわり



後方の白銀の山はエベレスト(左)と
ローツェ (埋骨地より仰ぐ)



温顔



ヒマラヤの峰々をまじかに臨む場所に埋め込まれたプレート

ヒマラヤ埋骨 1999. 11.6 中島昭子夫人、長男 剛氏、次男 陽氏 令妹 中島和子氏、菊池衣子氏
宮原 巍 氏、(針葉樹会)中川滋夫氏、有賀盈氏、山本尚禎氏 友人磯喜久子氏

ナムチェバザール(高度3600m シェルパ集落)→、馬で移動→、エベレストビュー・ホテルを下った小山。
(追悼 中島 寛 天地ある限り 2000. 10月より。)